# 縁帯文系土器群の成立と展開

## ——西日本縄文後期前半期の地域相——

千葉　豊

【要約】本稿の目的は、縄文後期前半期、西日本に分布した縁帯文系土器群を取り上げ、その成立・展開の様相を地域別編年の再検討を通じて明らかにし、その上で地域色を問題とし、地域間関係のあり方を追究することである。まず、縁帯文系土器群の成立・展開については、縁帯文土器成立期として広瀬土壙40段階を設定し、地域内の内在的な土器の変化と外来の影響の結合の中から縁帯文土器が成立してくることを明らかにし、さらに型式内容の再整理を通じて従来の編年を検討し、四期に分けて地域別に変遷過程を把握した。その上で、型式を構成する多様な要素に着目して、地域色が如何なる現れ方をしているかを検討した。縁帯文系土器群は、土器作りになくてはならない部分を共有する基層的地域が核となり、とくに有文土器の情報交換が密接に行われたことにより、広域な地域に親縁度の高い類似土器相として成立・展開した姿として捉えられ、地域間の親疎関係の変化によりⅣ期には東海西部が独自の土器地域圏に傾斜しつつあることが明らかとなった。

史林　七二巻六号　一九八九年一一月

## はじめに

日本先史土器である縄文土器の変遷に、年代的側面とともに地域的側面があることは古くから知られていた。[1] この認識は、縄文土器型式の編年研究をもたらし、日本全国にわたる精緻な編年体系が今日作成されつつある。それとともに、縄文土器型式の系譜的側面を明らかにすることを通して、型式の動態を明らかにし、型式相互の関係の態様から地域間関係を再構成し、縄文文化・社会の一側面を描き出そうとする研究も活発になりつつある。[2] 本稿は、こうした研究動向をふま

え、縁帯文土器と総称されるひとつの土器群を取り上げ、編年的系譜的に再検討を加えようとするものである。

縁帯文土器とは、屈曲あるいは肥厚によって頸部から区別した口縁部に文様の集約されている土器を説明するために、三森定男氏が最初に使用した用語である。[3] 現在では、中国・四国・近畿・東海西部といった西日本の縄文後期前半期の型式群の総称として、ほぼ定着するに至っている。[4] 後章で明らかにするように、これらの型式群は年代差、地域色を保ちながらも相互の密接な交流・影響によって成立、展開した親縁な型式群であり、系譜論的には縁帯文系土器群として把握するのが土器変遷の大枠を理解する上で有効であると思われる。

縁帯文系土器群の研究は資料の蓄積が進むとともに個別地域における編年的検討ばかりでなく、型式群相互の比較研究にも着手され検討が進みつつある。[5] その成立についても新資料の出現とともに新たな議論の対象となってきている。[6] しかしなお、縁帯文系土器群の成立、展開について地域別の編年にもとづいた詳細な検討は不十分と言わざるをえないであろう。とくに、なにが類似しなにが相異するのかを器種組成—個別器種—個別器種を構成する要素といった様々な側面から多面的に明らかにする必要があろう。こうした検討をへることによって縁帯文系土器群と総称される型式群のもつ構造が明らかになるであろうし、地域間関係の再構成という縄文土器研究の今日的課題へ接近することも可能になるであろう。

本稿は第一に縁帯文系土器群の成立・展開を地域別編年の再検討を通じて明らかにし、第二に地域別編年の併行関係にもとづいた地域色を検討し、地域間関係のあり方を追究することを課題とする。

最初に、叙上の課題に接近するための方法的前提について述べておこう。

**地域区分**　遺跡の分布状況、地理的状況を基に東海西部・近畿・中部瀬戸内・山陰の区分を基本的区分とし、[7] 個別地域とする。そして必要に応じてさらに地域を細分して検討し、実態に即した地域区分と地域間関係の復元を試みたい。

**土器分類の視点**　本稿では有文土器の型式変化を基軸にすえて変遷過程を把握し、層位資料、一括資料等で年代的独立性を保証するという方法をとる。そして、課題に接近するために(1)器形、(2)文様帯、(3)文様、(4)縄文原体、

(5)調整手法、(6)底部という土器の構成要素に着目した分類を試み、土器構成の基礎的事実を明らかにする。このうち、(1)〜(3)を総合的に把握して器種分類を試み、(4)〜(6)についてはそれぞれ個別に検討対象とする。[8] 器種の分類は、深鉢・鉢・浅鉢に大別し、それぞれを有文・縄文地・条線地・無文で細別する。注ぎ口を有する土器を注口とする。有文土器はさらに器形上、口縁部・頸部・胴部を区別しうるかという点と文様帯のあり方で分類し、さらに細部の形状や文様で細分を行う。

本稿では要素内で認められる多様な属性を変異として捉え、それら属性の変異を系譜的視点から説明する。この場合、ある変異を年代的変化かあるいは隣接地域からの影響によるものかの大別して二つの側面から解釈を試み、個別地域の年代的展開と地域間関係を再構成する視点とする。

① 山内清男「縄紋土器文化の真相」(『ドルメン』第一巻第四号 一九三二年)、同「縄紋土器型式の細別と大別」(『先史考古学』第一巻第一号、一九三七年)。いずれも山内清男『日本遠古之文化』新刷一九六七年再収による。

② 佐藤達夫「土器型式の実態——五領ヶ台式と勝坂式の間——」(『日本考古学の現状と課題』、一九七四年)、泉拓良「西日本縄文土器再考——近畿地方縄文中期後半を中心に——」(『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、一九八二年)、羽生淳子「縄文土器の類似度——土器の属性分析に基づく遺跡間の関係復元への新たな試み——」(『史学』五五—二・三、一九八六年)を指摘するにとどめる。方法論的には異なる手法を用いながら、単なる編年細分、地域細分にとどまらず、地域間の関係について動態的に捉え、社会的背景に言及している点で共通する。

③ 三森定男「西南日本縄文土器の研究」(『考古学論叢』第一号、一九三六年)。

④ 田中良之氏、松永幸男氏は九州に分布する鐘崎式土器も縁帯文土器に含め、東海西部から九州にいたる広域土器分布圏の存在を指摘している(田中良之・松永幸男「広域土器分布圏の諸相」〈古文化談叢』一四、一九八四年〉)。たしかに、鐘崎式土器の主要器種である有文鉢の文様帯規格や一部の文様は瀬戸内以東の縁帯文土器と共通し、類縁関係にあることはまちがいない。ただし、その鉢形の形態や口縁部、胴部文様は九州内部で独自の変化、展開を辿っており、瀬戸内以東の縁帯文土器とは一線を画して存在しているものと考えるべきである。こうした認識より本稿では鐘崎式土器は縁帯文土器に含めないこととする。また、南西四国・西部瀬戸内では鐘崎式土器と縁帯文土器が相互に認められ、複雑な展開をしていたことが推定される。この点を明らかにするためには鐘崎式土器の成立および展開過程を追究する必要があり、本稿の主題から離れるため南西四国・西部瀬戸内は対象地域からとりあえずはずすこととした。

⑤ 注④前掲田中・松永文献。

⑥ 泉拓良・玉田芳英「文様系統論――縁帯文土器――」（『季刊考古学』第一七号、一九八六年）、拙稿「備前市新庄西畑田遺跡採集の縄文土器」（『古代吉備』第一七集、一九八七年）。

⑦ 大井川以西の静岡県・愛知県・岐阜県（飛騨地方を除く）を東海西部、三重県・和歌山県・奈良県・滋賀県・福井県・京都府・大阪府・兵庫県を近畿、岡山県・香川県・広島県を中部瀬戸内、鳥取県・島根県を山陰とする。

⑧ (4)・(5)は器種をこえた共通性が地域別に認められるということ、(6)は器形全体にわたって統一的に把握しうる資料が少ないという理由による。

# 第一章　縁帯文系土器群の成立

## 1　問題の所在

本章では縁帯文系土器群の成立について検討するが、はじめにこの問題に関する研究状況を簡単にふりかえっておこう。

縁帯文系土器群は編年的には三本沈線によって特徴付けられる福田K2式に後続するという見解が概説書等によって示されてきたが[1]、福田K2式との関係について具体的に論じられたものではなかった。こうした状況の中で、泉拓良氏は近畿の縁帯文土器を三期に分けるという細分案を呈示し、その第一期の縁帯文土器（北白川上層式1期）に東日本の堀ノ内1式の影響があることを指摘し、縁帯文土器が堀ノ内1式の影響で成立した可能性を論じるとともに近畿の第一期の縁帯文土器は瀬戸内を中心に分布する福田K2式に併行するという編年関係を示した[2]。これは福田K2式と縁帯文土器の関係についてはじめて系譜論的に取り上げた論考であったと言いうる。その後、田中良之・松永幸男両氏も福田K2式および縁帯文系土器群、北部九州の鐘崎式の文様・器形の属性分析を行い、近畿の第一期の縁帯文土器は、東日本の土器の影響下で成立した、福田K2式に併行する土器であり、瀬戸内の縁帯文土器（彦崎K1式）は一段階新しくなるという見解に達している[3]。

しかし、両者の立論の背景にあったのは福田K2式は近畿には分布しないという認識であった。ところが近年、福田K

2式は近畿でも相次いで発見されはじめ、福田K2式が近畿に主体的に分布していたことはもはや疑い得ない事実となっている。[4] このため、福田K2式と縁帯文土器の関係は編年関係、系譜関係について再度検討する必要に迫られたといえるのである。

結論を先取り的に述べれば、福田K2式と従来の縁帯文土器1期（近畿の北白川上層式1期、瀬戸内の津雲A式）の間に縁帯文土器成立期として広瀬土壙40段階を設定することによって福田K2式と縁帯文土器は編年的前後関係として捉えられ、縁帯文土器は東日本の土器との密接な交流を契機にして福田K2式（新段階）の諸要素を継承・変化・発展させることによって成立した土器であり、地域内の内在的な土器の変化と外来の土器の影響が結び付いて型式変化を引き起こした一例として理解しうる。こうした理解については簡単にふれたことがあるが、[5] 泉氏も玉田芳英氏とともに該期の問題にふれ、従来の説を撤回し、福田K2式と縁帯文土器を編年的前後関係として捉え、福田K2式の伝統の中から縁帯文土器が成立してくるという新たな見解を呈示している。[6] これによって、福田K2式と縁帯文土器の編年的位置付け（その前後関係）は、ほぼ確定したといえるが両者の関係、すなわち、系譜論的評価にはなお相違が認められ、また成立期縁帯文土器の地域色の検討も不十分なまま残されている。そこで本章では前稿で不十分だった点を改めて、縁帯文土器の成立について再度取り上げてみたい。

## 2　福田K2式の細分

福田K2式は一九五一年、岡山県福田貝塚発掘資料をもとに山内清男氏によって瀬戸内の縄文後期前半に位置付けられた土器型式である。[7] 三本沈線による曲線的な縄文帯、沈線末端の入り組みといった特徴や植木鉢形の独特な器形の有文鉢が器種を構成するなど型式内容は比較的よく知られている。その成立過程は泉、玉田両氏によって「中津Ⅲ式」が設定され、中津式からの漸移的な変遷が明らかになりつつある。[8] 分布範囲については中国・四国以外に近畿および東海西部をそ

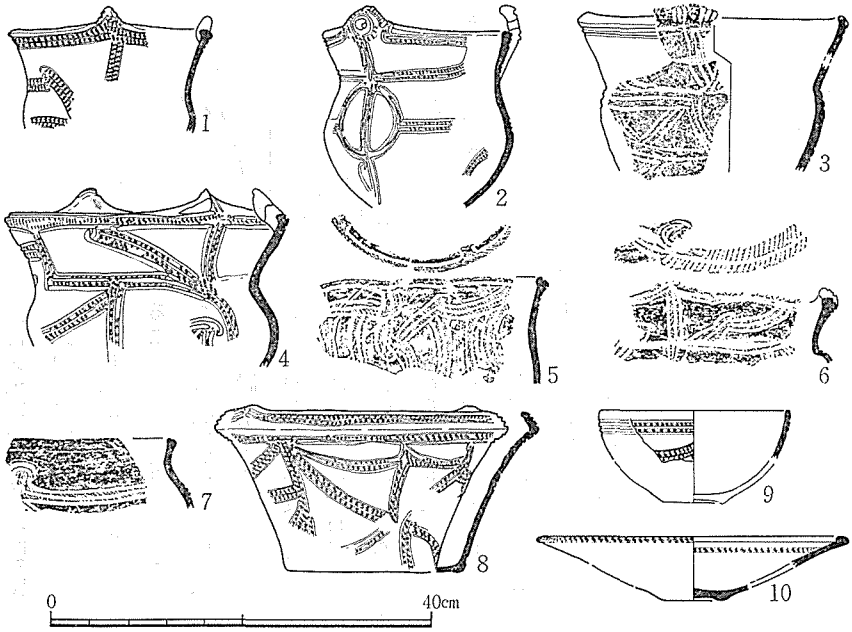



図1　福田K2式土器　縮尺1/8
（1広島県洗谷，2・4～8岡山県福田，3鳥取県島，9・10岡山県高島黒土）

の範囲に含めるかどうかで見解の相違をみてきたが、[9] 近畿については分布範囲に含まれることが明らかとなった。東海西部に関しては、資料が僅少なこともあって不明確な部分が多く、状況も複雑なようだ。東海西部の状況は、近畿、中国の状況を扱っておいてから検討することにしよう。

最初に福田K2式の器種組成を簡単にみておこう（図1）。福田K2式は有文深鉢A（1～6）・B（7）、有文鉢A（8）、有文浅鉢A（9）・B（10）、無文深鉢、無文浅鉢などから構成される。有文深鉢A・Bは口縁部文様帯の有無で区分し、文様帯をもたないBは稀である。有文鉢Aは底部から外反気味に口縁部まで立ち上がる植木鉢形。有文浅鉢Aは、口縁内湾するボウル形。有文浅鉢Bは外方に開く器高の低い皿形とも称すべき形態が多い。外面に文様帯をもつものと内面に文様帯をもつものの二者がある。無文深鉢は頸部が僅かにくびれるものが一般的で瀬戸内では口唇に刻みを有するものが比較的多い。無文浅鉢も皿形に近い形態を呈する。

縁帯文土器が口縁部を強調することに一つの特徴を有する土器であることを考慮して、福田K2式から縁帯文土器への型式変化を明らかにするためにまず福田K2式の有文深鉢A、有文鉢Aの口縁部の形態と文様帯に着目して細分を試みてみよう。口縁部の形状は次の三種に大別することが可能である⑩(図2)。

a種　口唇部がやや肥厚し、通常三本の沈線と縄文で構成される口縁部文様帯は口唇下の位置を占めるもの。

b種　口縁上面施文型であり、口唇の内側に粘土を貼付けて口縁端部を丸みをもたせて内外に肥厚させ、口縁部文様帯を構成する沈線の一部が口唇上をめぐり、口唇下に一～三条の沈線をめぐらせるもの。口唇上をめぐる沈線が一本のものをb1種、複数本のものをb2種としよう。b1種では口唇上と口唇下の沈線間に縄文を施すのが通有であり、b2種では口唇上の沈線間に縄文を施す例が多い。類例は少ないが刻みを加えたり、縄文を施さない等の変異がある。

c種　口縁外面施文型であり、上方へ逆く字形に口縁部を拡張し、二～四条の沈線を口唇上へ施すものである。この場合には、口唇上の沈線間に縄文を施し、縄文帯を形成する例が多く、通常、口唇下にも二、三条の沈線で構成される縄文帯が横走する。c種の場合にも刻みを端部に施したり、縄文施文の位置等でいくつかの変異がみられる。c種口縁をもつ例は鉢Aに多い。

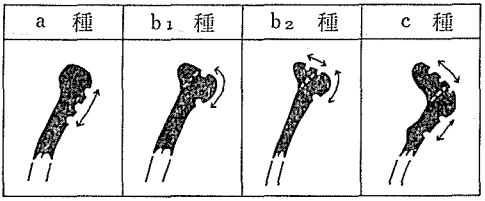


図2　福田K2式の口縁部断面の形状模式図
(↔は縄文施文)

さて、a種口縁の特徴は前段階の「中津Ⅲ式」の口縁の特徴を継承しており、b種、c種口縁はa種口縁の発達した形態として捉えられること、また、後述するようにb種・c種口縁から成立期縁帯文土器の口縁が生成してくることは明らかなので、この口縁部形態の差異はa種→b種・c種という時間的前後関係として捉えることが可能であろう。b1種口

縁とb2種口縁の関係については口唇部文様帯の発達という観点からみれば、b1種からb2種へという時間的変遷が想定されなくもないが、いずれも成立期縁帯文土器に継承されることから年代的に並立すると考える。また、c種口縁をもつ器種は鉢Aという特定の形態の器種に多く、b種に併立する器種間での差異として理解したい。b種、c種とも口唇の沈線間には縄文を施すことが一般的だが縄文施文後ないし縄文を施さず、口唇外側端部あるいは内側の端部ないし両端部に刻みを施す例も少数例ながら存在する。口唇外側端部への刻みは後続する成立期縁帯文土器で多用される要素である。a種～c種口縁とも波状の形態をとるものは中津式と比較して少なくなり、平縁で部分的に突起を有するものが多くなる。突起の形状は平縁化にともなって波頂部が突起状に作り出され、中津式の波頂部文様に由来する弧状沈線による文様をもつものが多いが、筒状の突起となるもの、ノ字状に粘土紐がまき込み発達した山形の突起になるものがあり、いずれも成立期縁帯文土器の口縁部突起の祖型となる。

さて、口縁部形態の差異は頸・胴部の文様の上ではどのように捉えられようか。福田K2式の文様は三本沈線による奔放な曲線文様として描かれ、文様意匠が規則的に繰り返し表現されるという縄文土器の文様表現に一般的な構成を取らないことに大きな特徴を有する。こうした文様構成は後期初頭、中津式の文様構成の崩壊にともなう、中津式文様の変形として理解できるだろう。[11] 中津1・2式の文様構成は頸・胴部の境界および胴下半部に横帯区画の性格を有する縄文帯をめぐらすことによって面的な文様構成を保持している。福田K2式の文様はこの横帯区画に上下方向に向かう縄文帯が結合し上下方向の文様意識が強くなった「中津Ⅲ式」の文様構成をへて、横帯区画が器面を一周せずに途中で切れ上下の縄文帯に接続して折れ曲がることによって成立してくると理解できる。a種口縁をもつ例では横帯区画の伝統（横位方向の縄文帯）がなお残存し、面的構成の雰囲気を感じさせるものもある（図1―2・3）のに対し、b種、c種口縁をもつ例では曲線的な縄文帯が頸・胴部全面にわたって不規則に展開し（図1―5）、文様意匠を抽出することが困難であることを理解しうるであろう。a種とb種・c種の差異は頸・胴部の文様の上からも型式学的前後関係として考えることができるのである。

以上の検討結果から、a種口縁をもつ土器を福田K2式(古段階)、b種およびc種口縁をもつ土器を福田K2式(新段階)として論を進めることにしたい。

従来、福田K2式の細分については柳沢清一氏[12]や泉氏[13]によるものがある。柳沢氏は口縁部や胴部の文様から福田K2式を4段階に細別しているが、文様の解釈には納得しがたい部分も多く、口縁部についても筆者の分類によるb種とc種を年代差として捉えているようで筆者の変遷観とは異なったものとなっている。泉氏は大阪府四ッ池F地点でまとまって出土した口唇部の沈線外側に刻みを有する土器を福田K2式の新しい様相を示すものとして「四ッ池型」、「四ッ池式」と呼んだ。そして、近年、玉田氏とともに福田K2式の範疇からはずし、福田K2式と縁帯文土器をつなぐ型式として「四ッ池式」を新たに提唱している。[14]この「四ッ池式」をいかに理解するかが福田K2式から縁帯文土器への変遷を考える上で鍵となると考えるので、次に「四ッ池式」について検討してみよう。

### 3 「四ッ池式」の再検討と広瀬土壙40段階の設定

泉・玉田両氏は「四ッ池式」を再定義する過程で、標識となった資料以外に他遺跡の関連資料を用いてその文様構成等についてふれている。その見解は種々の有益な内容を含むがまず「四ッ池式」設定の契機となった標識遺跡(大阪府四ッ池F地点)出土の土器[15]について検討を加えることが必要であろう。

図3に示した資料が設定の根拠になったものである。福田K2式に特徴的な三条沈線による沈線帯をもちながらも福田K2式には類別の少ない口唇外側端部に刻みが施されている土器が福田K2式の新しい様相を示すものとして、まず最初に理解されたのである。

これらの土器を瞥見して気付くことは、筆者のb種口縁をもつもの(1・2)のほかにb種口縁同様、口唇部が肥厚し口唇上に一、二本の沈線をめぐらしながらも口唇下の横走沈線が消失している例が多いということである。

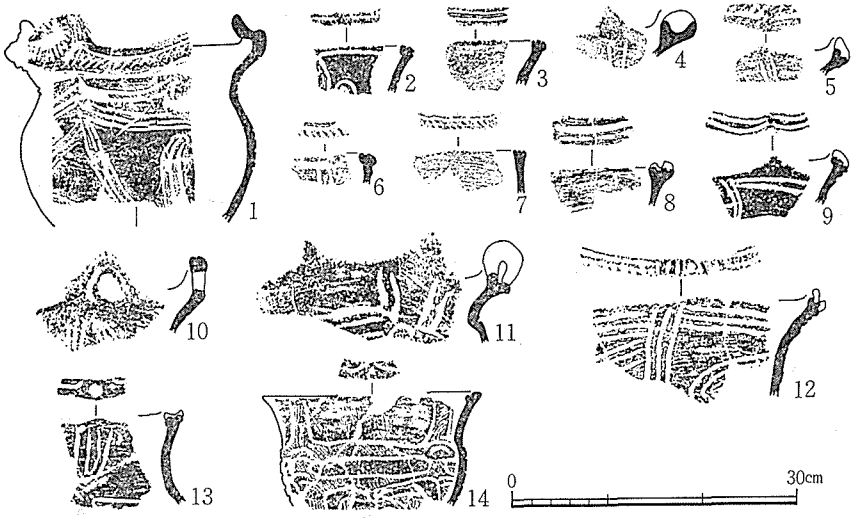



図３　大阪府四ツ池Ｆ地点出土土器　縮尺1/8

こうした口縁部の形状を有するものをｄ種口縁とし、口唇上をめぐる沈線が１本のものをｄ１種、複数本のものをｄ２種としておこう。ｄ種口縁はｂ種口縁の口唇下の沈線を省略することによって成立すると考えられ、ｂ１種→ｄ１種、ｂ２種→ｄ２種という型式学的変遷が想定される。こうした型式学的変化は頸・胴部の文様構成の上でも認めることができる。ａ種～ｃ種口縁をもつ土器では頸部の強くくびれる深鉢であっても文様は頸部と胴部で分帯の傾向を示しながらも一体のものとして描かれている。これに対して、四ツ池Ｆ地点のｄ種口縁をもつ頸部のくびれる深鉢は頸部の無文化、頸・胴部の分帯の傾向が一層すすんでいることが指摘できよう。再三述べているように福田Ｋ２式は近畿にも分布しているので、こうした差異は地域的差異ではなく時間的差異として捉えることが妥当である。

このように考えることが許されるなら、口縁外側端部への刻みという要素に着目して当初設定された「四ツ池式」はｂ種口縁をもつ福田Ｋ２式（新段階）とｄ種口縁を有する福田Ｋ２式（新段階）に後続する段階の二段階の資料を含んでいると考定することができよう。

泉・玉田両氏は「四ツ池式」を再定義する過程で四ツ池Ｆ地点の土器を一括資料と考え、図３―１を「四ツ池式」を代表する土器の一つとして例示している。[16] しかし、筆者が検討した結果では四ツ池

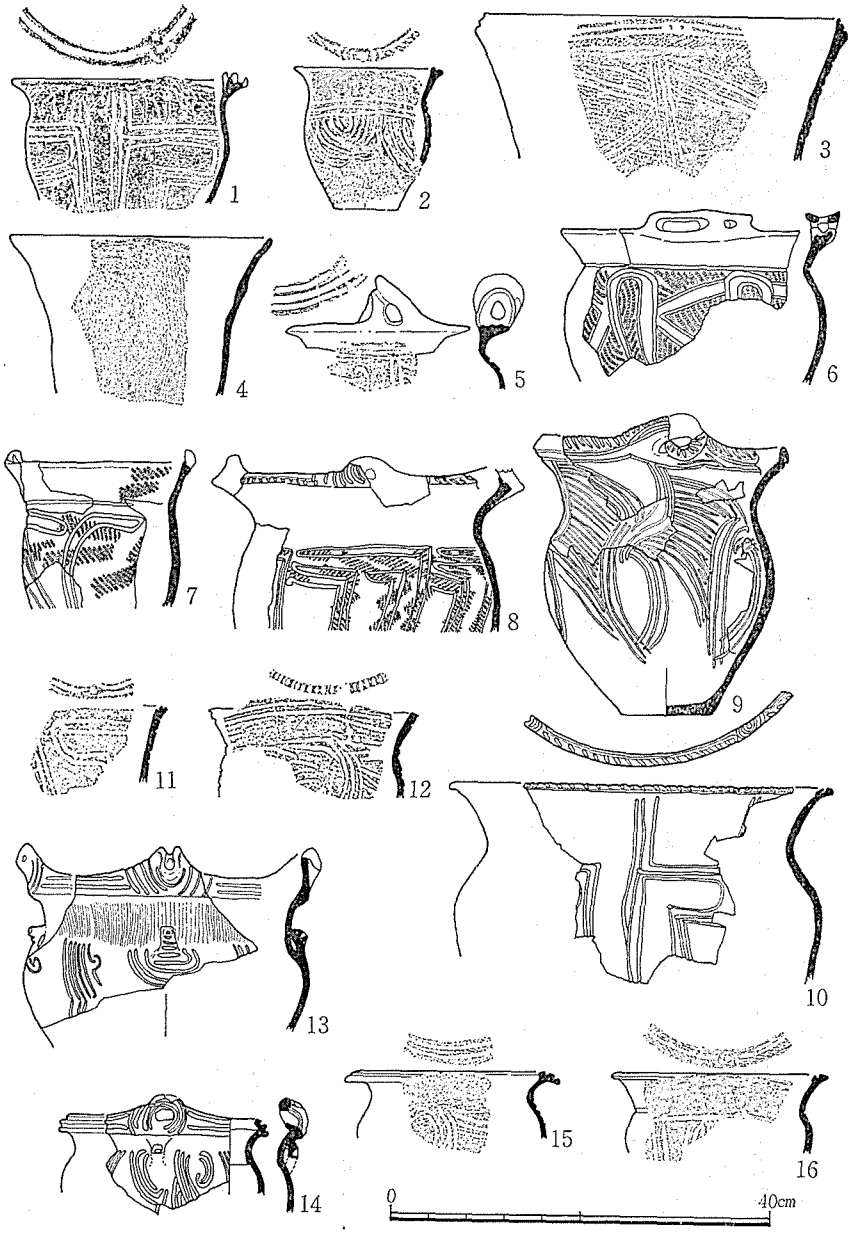



図4　近畿における広瀬土壙40段階の土器様相　縮尺1/8
（1～4奈良県広瀬，5大阪府淡輪，6大阪府仏並，7・8福井県右近次郎，9福井県三室，10三重県中戸，11・12大阪府西浦橋，13京都府下海印寺，14～16兵庫県小森岡）

F地点の土器は福田K2式に後続する土器を主体にしながらも福田K2式も含み、例示資料は口縁部の形状、頸・胴部の文様構成から判断して、福田K2式（新段階）に属すると理解する。筆者が福田K2式（新段階）に後続する段階を「四ッ池式」と呼称せず、広瀬土壙40段階を設定するのは以上の理由による。

図4－1～4は奈良県広瀬遺跡の土壙40から出土した土器である。[17] 図示資料以外にも若干の中期末を含む、多くの土器が本土壙からは出土しているが前後する時期のものは存在せず、一括性の高い資料と考えることができる。口唇部の沈線外側端部に刻みを有する土器（2）や口唇上に太い沈線を有する土器（1）は四ッ池F地点のd1種口縁をもつ土器と同一様相を示す。また、d2種をもつ土器（外側端部へ刻みを有するものや沈線間に縄文を施すものがある）も共伴している。b種、c種口縁をもつ土器を伴わない点と頸・胴部を区画する沈線が成立し、頸部無文帯が確立している土器の存在は福田K2式（新段階）よりも新しい段階であることを示す。文様論的には1の胴部文様は三本沈線による直線的な文様として描かれ、福田K2式の曲線的文様からの変化で説明でき、2の多重沈線文は福田K2式の文様からは辿れない新出の要素である。そして、頸・胴部の文様帯の分化、口縁部の肥厚・拡張、口唇部の主要文様としての対向連弧文といった要素は第一期縁帯文土器とされてきた北白川上層式1期の構成要素に類似するが、後述するように、北白川上層式1期ではd種口縁は少量となり、e種口縁が主体を占めるようになることや文様構成に型式学的変化が認められること、伴出した関東系土器の比較から考えて、北白川上層式1期に先行する段階にあると考えられよう。以上の点から、福田K2式（新段階）と北白川上層式1期の間をつなぐ段階として広瀬土壙40出土土器や四ッ池F地点の福田K2式を除いた資料をあてることができると考えるのである。この段階の時間的独立性は広瀬土壙40出土の一括資料によって保証されているので、広瀬土壙40段階と仮称し、次に、本段階の地域的様相をもう少し詳しく検討してみよう。

## 4　近畿・中部瀬戸内・山陰地域における縁帯文土器の成立

まず、近畿の様相から検討してみよう。ほぼ近畿全域で資料が認められる[18]（図4）。

器種構成を伺うにたる資料はやはり広瀬土壙40の資料である。既にふれた深鉢Aのほかに頸部がややくびれ、地文として頸胴部全面に条線文を施した深鉢（4）、巻貝調整の無文深鉢、後述する関東系深鉢（3）から構成されている。条線地深鉢は、三重県中戸の住居跡SB25、土壙SK26からも有文土器とともに多量に出土しており、安定した存在であることを示している。近畿では条線地深鉢は後期初頭の中津式にともなうが福田K2式期では、比較的まとまった資料である滋賀県仏性寺で伴出しておらず[19]、器種を構成していないと推測する。一方、関東では後期初頭の称名寺式、前半の堀之内式と条線地深鉢が安定的に器種を構成している。広瀬土壙40では関東系土器の流入が認められるので、本段階の条線地深鉢は関東系土器の流入にともなって、新たに成立した可能性が高い。資料状況から判断して近畿中央部でも東半の地域で成立したと考えられる。また、日本海沿岸部である近畿北部では基本的な器種組成から欠落するようである。

次に、有文深鉢についてみてみよう。深鉢Aの口縁部形態では、d1種やd2種以外にいくつかの変異がみられる。9は口縁下の横走沈線が残存しており、b1種に類似するがb種と比較して、外側端部の張りが弱いことからb種とは明瞭に区別でき、横走沈線は残存的形態と理解しうる。これをb3種としておく。12は口唇上の沈線が省略された刻みのみのもので類例は少ない。d3種とする。また8・13・14は口縁部が上方へ立ち上がりc種口縁に類似する。しかし、ともに口縁下の横走沈線は省略され、頸部の接合の仕方も異なる。これをc2種口縁とし、前者をc1種として区別する。口縁部の形状をみる限り、c1種からの系譜で捉えられようが、c1種口縁をもつ土器は鉢Aにほぼ限定されるので器種を越えた影響があったとみるべきであろうか。一方、d種口縁に類似するが、口縁が短く外反気味に内折し一、二条の沈線をめぐらすものがある。広瀬（3）、和歌山県亀川に全体の様相を捉えられる資料があり、口縁部形態、体部文様とも堀之内

1式そのものであり、関東系有文深鉢と規定したい。次に、筒状突起、山形突起および橋状把手が注意されよう。これらはいずれも福田K2式にその祖型が認められる。橋状把手は搬入品とみられる京都府下海印寺例[20](13)を除けば、近畿北部から大阪湾沿岸部に分布する。山陰で類例が多く、分布が西に偏る。

次に頸胴部の文様構成をみてみよう。頸胴部の境に界線を持ち、頸部を無文帯とするものが多いが頸部のくびれの弱い類では頸胴部で文様帯は区別されない。

文様は大きく三類に分類することができる。福田K2式からの変化で考えられるもの（a類）、関東系土器の文様を取り込んだと考えられるもの（b類、c類）である。a類は変化の方向について数種類の系統が存在し、基本的に三細分することが可能である。a1類は曲線文様の直線化・簡略化でとらえられるもの（図4—1・7・8・10）、a2類は縦方向の文様構成を基本にして沈線末端の入り組みが多用されるもの（9・13・14）、a3類はやや感覚的表現になるが曲線文様をそのまま粗雑にして継承しているもの(12)である。b類は多重半円文(2)である。多重半円文は福田K2式の文様に系譜を求めることが困難で他地域に系譜を求めるべきである。堀之内1式の胴部文様との類似が問題になろう。これはc類(6・11)についても指摘でき、頸部のくびれの弱い類では頸胴部で文様が一体化して描かれ、文様は関東系深鉢(3)に類似する。頸胴部の文様分化の一般化にともなって後続型式ではc類文様は廃れるが、b類文様は文様の複雑化をともなって多用される。

以上の特徴のうち、近畿北部（日本海沿岸部）の兵庫県小森岡ではa2類文様、橋状把手が多いという事実が指摘でき、他の要素からも山陰東部との強い結びつきが伺える。[21]

中部瀬戸内に移ろう（図5上半）。比較的まとまった資料は岡山県岡山大学学生寮予定地、[22]広島県洗谷、[23]芋平で[24]出土している。有文深鉢A、無文深鉢、無文鉢がみとめられる。深鉢Aの口縁はd1種(1・4・7～10)、c2種(2・3)以外に口縁の内側を肥厚させ内縁に刻みを多用させた文様をもつ口縁内面施文型(5・6)が目だつ。これをe種口縁としよう。

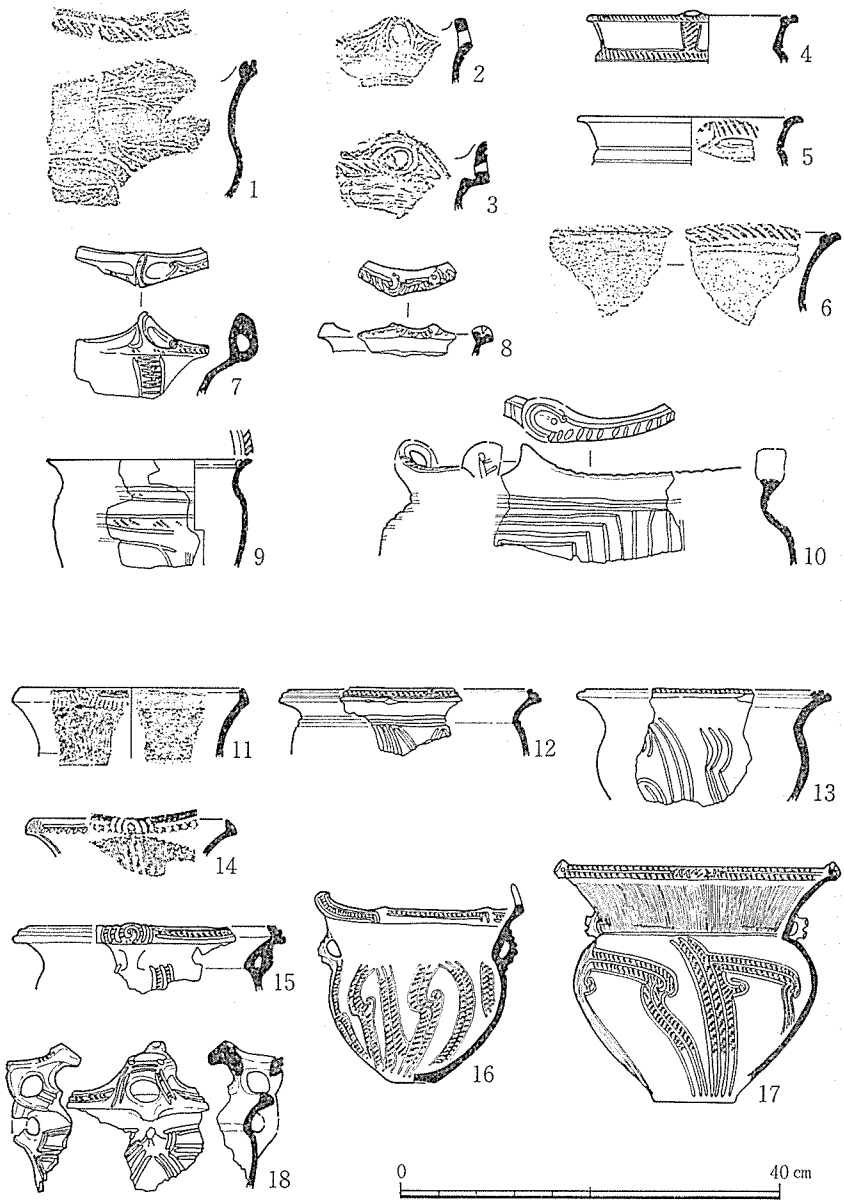



図5　中部瀬戸内・山陰における広瀬土壙40段階の土器様相　縮尺1/8
（1広島県芋平，2～6広島県洗谷，7～10岡山県岡山大学学生寮予定地，11～15・18鳥取県島，16鳥取県布勢，17鳥取県森藤）

e種口縁は、瀬戸内に多い形態である。頸部は無文帯になる例が多いが、突起下のみ帯状（4）、梯子状（7）の文様をもつものもある。文様はa1類（1・9・10）が認められる。

次に山陰についてみてみたい（図5下半）。鳥取県島[25]、布勢[26]、森藤[27]、栗谷[28]、島根県都橋[29]に比較的まとまった資料がある。このうち、森藤では第一号住居跡から有文深鉢Aと無文深鉢・浅鉢が一括して出土している。

深鉢Aでは、口縁部形態の形状は上面施文型（d1～3種—13）、外面施文型（C2種—11・12・14～18）がみられるが、斜め上方に立ち上がる上面施文と外面施文の中間的なものが多い。文様構成は頸部を無文帯とする例が多いが、頸部のくびれの弱いものでは頸胴部の文様帯が分離しないものもある。文様はa2類（16・17）、a3類（13）の福田K2式系の文様が確認しうる。このうちa2類が量的に多く、縄文を充塡する例が多いのも特徴的であろう。

次に、橋状把手を有する例（15～18）が多いことが山陰の特徴として指摘できよう。橋状把手は把手部上端の位置で1類—橋部上端が口縁外側端部に接合するもの、2種—橋部上端が口縁直下の位置にくるもの、3種—橋部上端が頸部中央やや下の位置にくるものに細分できる。突起上を加飾する例は何れも3類に属する。近畿で出土した例のうち、近畿南部の下海印寺例（図4—13）は頸部に「細密条痕」[30]を有する。「細密条痕」は縄文中期以降、山陰東部、近畿北部に特有の器面調整技法であり、下海印寺例はこれらの地域に出自を求められ、類例数から判断しても、橋状把手は山陰東部、近畿北部に特徴的なものとみることができよう。橋状把手の系譜については、福田K2式に少量みられる橋状把手に出自を求めておきたい。

こうした様相を有する山陰の土器に関して、近年、久保穣二朗氏は「福田KⅡ式と縁帯文土器の中間的な土器群」と捉え、布勢式と呼ぶことを提唱している。[31]今後、器種組成を明らかにする作業が必要ではあるが広瀬土壙40段階の山陰型として布勢式を設定することは首肯しえよう。

以上、近畿・中部瀬戸内・山陰地域の広瀬土壙40段階の様相を検討した。有文深鉢についていえば、同一の特徴を共有

しており、類似した土器様相を示すことが理解しえよう。また、詳細にみると各々の地域で地域色が指摘しうることも明らかになったであろう。c2種口縁が比較的多くa2類文様が優勢で橋状把手が特徴的な山陰、e種口縁が特徴的でa1類文様が優勢な中部瀬戸内が指摘でき、両地域ともb類、c類文様という関東系要素や関東系深鉢がみられないのは重要であろう。一方、近畿では近畿北部を除くと口縁部の形状や頸胴部の文様に多様性が指摘できる。また、関東系深鉢が近畿南部には流入している。これに対して、近畿北部は山陰東部との共通性が強いことが明らかになったであろう。

ここで、胴部文様における施文順序についてみておこう。福田K2式の胴部文様は三条一組の沈線束で文様を描いた後に、沈線間に縄文を施すという充塡縄文の手法をとる。縄文を施さない場合もあるが縄文を施す場合はすべてこの手法による。これに対し、広瀬土壙40段階では福田K2式の伝統をひく充塡縄文以外に縄文を施さない例が多くなり、縄文施文部と無文部の逆転がみられる例（図4—6）や地文に縄文を施してから沈線を描くという明らかに福田K2式の施文手法の規格から逸脱した例（図4—7・8）も出現する。こうした現象の背景にはやはり東日本の影響を想定すべきであろう。広瀬土壙40で共伴した関東系深鉢（図4—3）は地文に縄文を施してから沈線で文様を描いており、施文順序・施文部位の転換がこうした土器の流入で惹起されたことを物語っているといえよう。

こうした状況を勘案すれば、広瀬土壙40段階に属する近畿・中部瀬戸内・山陰の土器群は近畿まで直接的流入が認められる関東系有文深鉢の影響が型式変化のひとつの要因となり、福田K2式の伝統を近畿・中部瀬戸内・山陰という地域的な主体性を保ちながら継承、変化、発展させることによって成立したと考えることができよう。

器種組成については明確にしうる資料が少ないが本段階で鉢Aが姿を消す。また、近畿南部では条線地深鉢が器種を構成していることに注意したい。これが既述したように関東系土器の影響によって成立したと理解することが正しければ影響の強さを物語る資料といえよう。このように考えることができるならば、縁帯文系土器群分布の東縁に位置する東海西部の状況が次に問題になってこよう。そこで、本章の最後に、東海西部の状況を検討してみたいと思う。

## 5　東海西部における縁帯文土器の成立（図6）

まず、縁帯文土器の成立にかかわって福田K2式期の状況が問題となろう。この問題を明らかにするためにはなお資料が不足しているが伊勢湾沿岸部の三重県金剛坂[32]（1・2）、愛知県林ノ峰[33]（3～5）には断片的ながら福田K2式が認められるので東海西部西半までは福田K2式の分布域と予測しうる。これに対し、東海西部東半では蜆塚[34]（8）、西貝塚[35]（6・7）で称名寺2式が認められ、東海西部でも東半の地域には称名寺2式が進出していたものと考えたい。福田K2式と称名寺2式の同時性は、型式学的比較による指摘があるが、近畿の広瀬土壙40段階に伴出した関東系土器が堀の内1式（古）・（中）であることからも推定しうる。このように東海西部は西半は福田K2式、東半は称名寺2式が進出していて東西土器圏の境をなしていたものと思

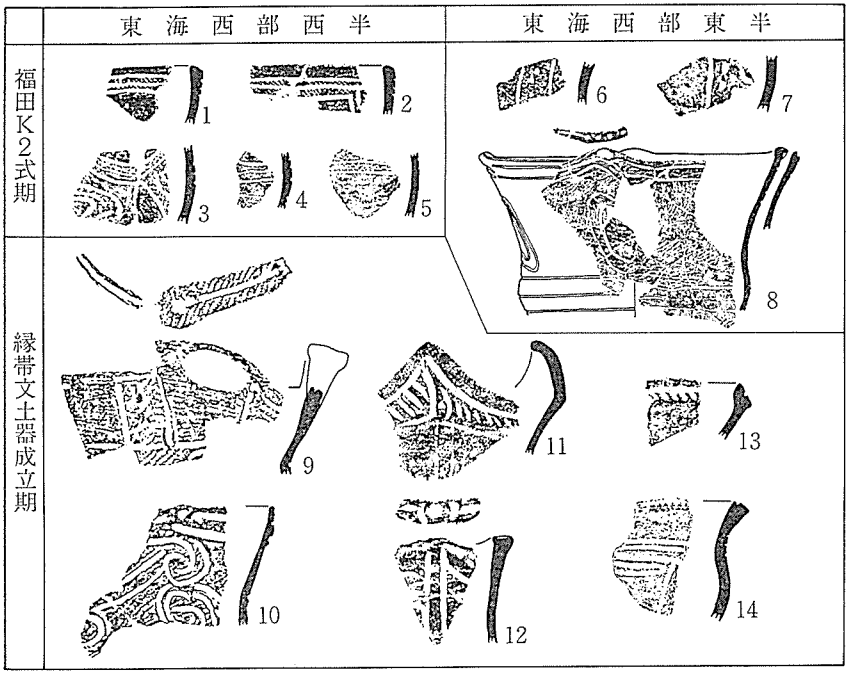



図6　東海西部における縁帯文土器の成立　縮尺：復元図1/10，断面図1/6
（1・2三重県金剛坂，3～5愛知県林ノ峰，6・7・13・14静岡県西貝塚，8静岡県蜆塚，9・10愛知県咲畑，11・12愛知県朝日）

われる。こうした状況の中から広瀬土壙40段階の土器が成立する。まとまった資料は少ないが愛知県林ノ峰[37]、朝日[38]、咲畑[39]、静岡県半場[40]、西貝塚[41]、石原[42]で有文深鉢A（9・11・12・14）および関東系深鉢（10・13）がみられる。深鉢Aの口縁部形態では上面施文型（d1種、d2種）、外面施文型（e種）が認められ、文様ではa1種、c種がある。土器の様相は近畿南部と類似し、関東系土器の近畿までの流入を契機に、福田K2式の型式変化より成立した土器群が逆に称名寺2式の土器圏に含まれていた東海西部東半にまで分布圏を拡大し、類似相を出現させたと想定できよう。[43]

以上、述べてきたように、東海西部から瀬戸内、山陰の西日本に成立した広瀬土壙40段階の類似相は、共通の基盤であった福田K2式に由来する伝統と関東系土器の流入という外来の影響の混交の中から生じてきたと理解しうる。そして、広瀬土壙40段階は福田K2式と後述する従来の縁帯文土器1期との両者の中間的様相を示すが、器種構成の変化、東日本の土器との交流の開始等、型式変化は大きく、後続する系統の起点として把握することがより実態に即しているといえよう。よって、広瀬土壙40段階の成立を以て縁帯文土器の成立と規定し、本段階を縁帯文土器成立期と規定しえると考えるのである。

① 鎌木義昌・木村幹夫「各地域の縄文式土器――中国――」（『日本考古学講座』三、一九五六年）、鎌木義昌・高橋護「縄文文化の発展と地域性――瀬戸内――」（『日本の考古学』Ⅱ、一九六五年）。
② 泉拓良「後期の土器――近畿地方の土器――」（『縄文文化の研究』四、一九八一年）。
③ はじめに注④前掲文献。
④ 和歌山県下尾井（小野山節・清水芳裕編『和歌山県北山村下尾井遺跡』、一九七九年）、滋賀県仏性寺（兼康保明・堀内宏司「高島郡マキノ町仏性寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅵ―三、一九七九年）、福井県右近次郎（木下哲夫ほか『右近次郎遺跡』Ⅱ「大野市文化財調査報告書』第三冊、一九八五年）で比較的まとまった資料が報告されている。
⑤ はじめに注⑥前掲、千葉文献。
⑥ はじめに注⑥、泉・玉田文献。
⑦ 原始文化第三回研究会で成果が発表されたことが注①前掲、鎌木・木村文献によって知られる。
⑧ はじめに注⑥前掲、泉・玉田文献。
⑨ 中国・四国に限定する見解として、泉拓良「西日本の縄文土器」（『世界陶磁全集』一、一九七九年）、注③前掲文献。近畿、東海西部にも分布するとしたのが今村啓爾「称名寺式土器の研究」（下）（『考古学雑誌』第六三巻第二号、一九七七年）。泉氏はその後、注⑥前掲文献で近畿も福田K2式土器の分布圏に含まれるとし、考えを改めている。

⑩ 注⑤前掲文献では、本稿でb種、c種としたものをまとめてb種とし、二大別、三細分したが分類が不十分であった。前稿での分類は本稿でもって訂正するものとしたい。

⑪ はじめに注⑥前掲、泉・玉田文献。

⑫ 柳沢清一「称名寺式土器論（結篇）」（『古代』第六八号、一九八〇年）。

⑬ 泉拓良「縄文後期の土器――近畿・中国・四国地方」（『縄文土器大成』第三巻　後期、一九八一年）、同「一九八五年の動向　縄文時代（西日本）」（『考古学ジャーナル』二六三、一九八六年、木村幾太郎氏と共同執筆で該当部分は泉氏が担当）。

⑭ はじめに注⑥前掲、泉・玉田文献。

⑮ 第二阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池遺跡』一六・一七、一九七一年。

⑯ 前掲注⑥文献。

⑰ 松田真一「山添村広瀬遺跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）一九八一年度』、一九八三年）。

⑱ 比較的まとまった資料として、三重県中戸（一九八七年、三重県教育委員会発掘資料）、滋賀県仏性寺（注④前掲、兼康・堀内文献）、奈良県布留（島田暁・小島俊次「布留遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十輯、一九五八年）、沢（小泉俊夫・岡崎晋明「榛原町沢遺跡」『大和考古資料目録』第一四集、一九八七年）、京都府下海印寺（渡辺誠編『京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書』）、長岡京市文化財調査報告書』第一〇冊、一九八二年）、和歌山県下尾井（注④前掲小野山・清水文献）、亀川（前田敬彦ほか『亀川遺跡』Ⅴ、一九八五年）、大阪府森の宮（八木久栄編『森の宮遺跡第三次・四次発掘調査報告書』、一九七八年）、西浦橋（橋本高明編『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』Ⅱ、一九八四年）、仏並（岩崎二郎編『仏並遺跡』『（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第五輯、一九八六年）、淡輪（大阪府教育委員会『岬町遺跡群発掘調査概要――小島東遺跡・淡輪遺跡――』、一九七八年）、福井県右近次郎（注④前掲木下文献）、三室遺跡（仁科章・工藤俊樹『三室遺跡』Ⅱ『勝山市文化財調査報告』第五集、一九八三年）、兵庫県小森岡（一九八七年、竹野町教育委員会、試掘調査資料）などがあり、近畿一円で資料がみとめられる。

なお、三重県中戸、兵庫県小森岡の資料に関しては関係機関及び中戸については山田猛氏、駒田利治氏、仁保晋作氏、小森岡については高松龍暉氏の御厚意によって、出土縄文土器の整理を担当する機会を筆者に与えていただき、また、資料の一部を本稿に使用することを快諾していただいた。ここに謝意を表しておきたい。いずれも近日中に報告書刊行の予定である。

⑲ 注④前掲、兼康・堀内文献。

⑳ 注⑱前掲、渡辺文献。後述するように、本土器は頸部に「細密条痕」をもち、在地の土器と明確に異なる。

㉑ 小森岡では、有文深鉢や無文深鉢の調整に、山陰東部の基本的調整手法である「細密条痕」が多用される。

㉒ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『岡山大学構内遺跡調査研究年報』五、一九八八年。

㉓ 小都隆編『洗谷貝塚』、一九七六年。

㉔ 小都隆「芦品郡新市町芋平遺跡について」（『芸備』第四集、一九七六年）。

㉕ 久保穣二朗ほか『島遺跡発掘調査報告書』第一集（『北条町埋蔵文化財報告書』二、一九八三年）。

㉖ 鳥取県教育文化財団『布勢遺跡発掘調査報告書』（『鳥取県教育文化財団調査報告書』七、一九八一年）。

㉗ 東伯町教育委員会『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』（『東

伯町文化財発掘調査報告書』第一〇集、一九八七年)。

㉘ 谷岡陽一ほか『栗谷遺跡発掘調査報告書』Ⅱ、一九八九年。

㉙ 足立克己「山陰岩見地方における縄文後期前〜中葉土器について」(『東アジアの考古と歴史』中、岡崎敬先生退官記念論集、一九八七年)。

㉚ 弥生土器や土師器の調整手法にみられる「刷毛目」ときわめてよく似た条痕である。横山浩一氏は実験的検討から針葉樹の小口板による擦痕に類似していることを明らかにしている(横山浩一「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』第二四号、一九七九年)。ただし、横山氏はこの種の条痕と「刷毛目」には微細な相違があることも指摘しており、筆者も横山氏にしたがって、この種の条痕を「細密条痕」と呼んでおきたい。

㉛ 久保穣二朗「鳥取県下における後期前葉から中葉にかけての縄文土器の変遷について」(注㉗前掲文献)。

㉜ 明和町教育委員会『金剛坂遺跡発掘調査報告』、一九七一年。

㉝ 山下勝年ほか『林ノ峰貝塚』Ⅰ(『南知多町文化財調査報告書』第五集、一九八三年)。

㉞ 向坂鋼二ほか『蜆塚遺跡』Ⅴ・Ⅵ、一九八五年。

㉟ 市原壽文ほか『西貝塚』、一九六一年。

㊱ 注⑨前掲、今村文献。

㊲ 注㉝前掲文献。

㊳ 愛知県教育委員会『朝日遺跡』、一九八二年。

㊴ 久永春男ほか『咲畑貝塚』、一九六〇年。

㊵ 向坂鋼二ほか『半場遺跡一九七八年度発掘調査報告書』、一九八二年。

㊶ 注㉟前掲文献。

㊷ 市原壽文「遠江石原貝塚の研究」(『人文論集』一八、一九六七年)。

㊸ d1種口縁とa1種文様をもつ深鉢Aが関東系(堀之内式)土器圏に含まれる静岡県東部の富士宮町箕輪遺跡で出土しており(加藤学園考古学研究所『駿豆地方の縄文土器集成(実測図)』、一九八三年)、この時期に東西間の交流が強まり、土器製作にかかわる情報が広範な地域間を流れたことを示していると考えられる。西日本の側からみると、それは東日本系土器の流入という現象で捉えられるが口縁部外側端部の刻みなどは逆に西日本から東へ流れた手法と考えられるように、交流は一方的であったというより相互的であったと考えるべきである。前段階の福田K2式と称名寺2式はほとんど相互影響の認められない排他的に存立していた型式であり、この点でもこの段階にひとつの画期を見出すことができるであろう。

## 第二章　縁帯文系土器群の展開

### 1　問題の所在

前章で、縁帯文系土器群の成立の問題を論じ、縁帯文土器成立期として広瀬土壙40段階を設定し、地域別に縁帯文土器の成立過程を明らかにした。本章では、こうして成立した縁帯文土器の展開を地域別に検討することを通じて縁帯文系土

器群として総称される土器群の構造を年代的展開の中で明らかにしてゆきたいと考える。まず、この問題を検討するにあたって研究動向を概観しておこう。最初に述べたように、縁帯文土器は戦後、西日本縄文後期前半期の土器群の総称として定着した用語であるが、近畿、東海西部で伴出する関東系土器が数型式に及ぶことから年代的細分が予想されていた。分布の東縁に位置する東海西部では一九六〇年代に蜆塚遺跡の発掘調査等をもとにした編年が麻生優氏[1]や市原壽文・大参義一両氏[2]あるいは久永春男氏[3]らによって組み立てられている。また、最近では増子康真氏の東海西部西半に関する[4]、そして山下勝年氏の林ノ峰貝塚における[5]編年研究が発表されている。しかし、いずれの編年案も器種組成の明確化や型式学的連続性の解釈等、多くの問題を残しているのが現状であろう。

一方、近畿では一九七〇年代以降、資料の飛躍的増加に伴い、土器研究も進展し、大阪府縄手遺跡の調査で縄手1・2式[6]が、京都府桑飼下遺跡の調査で桑飼下式[7]が提唱された。こうした成果を受け、かつ、北白川遺跡群の土器分析を通じて[8]、泉拓良氏は従来、北白川上層式と呼ばれていた時期を北白川上層式1期→2期→3期の三時期に細分する案を呈示した[9]。器種組成を明らかにした点は高く評価され、大筋での編年はこれによって定まったものとみてよい。

これに対して、編年的検討がもっとも遅れているのが中国地方であろう。中国地方の研究は中部瀬戸内が中心になって進められ、戦前には津雲A式[10]が戦後には彦崎K1式・K2式[11]が設定された。しかし、津雲A式と彦崎K1式が年代的前後関係にあるのかあるいは地域色を示すのか明確な見解はなく、型式内容の捉え方についても、論者によって大きな相違があり、混乱した状況を呈している[12]。

以上、概観したように地域によって研究状況にかなりの差があることが認識できよう。ここでは、有文土器の変化を中心に地域別に従来の編年を再検討し、型式内容を明らかにしたいと思う。

## 2 近畿地域（図7）

近畿の縁帯文土器の展開に関しては、すでにふれたように泉氏の優れた研究があり、年代的展開と器種組成の基本的変遷が明らかにされている。ここではこうした成果を受け、二、三私見を加えつつ、展開の概略を述べておきたい。基準資料は泉氏が指摘した他に北白川上層式1期では大阪府仏並第73号住居跡出土の主たる土器[13]、北白川上層式2期では三重県下川原第9号住居跡出土土器[14]、大阪府縄手第10次出土土器[15]、北白川上層式3期では奈良県竹之内第七地点出土土器[16]を指摘でき、大阪府淡輪一九八六年度出土土器[17]も2期と3期にまたがるが良好な資料が出土している。

**北白川上層式1期**　有文深鉢A（1～4）・B（5）、関東系有文深鉢（6）、有文鉢B（9）・C、有文浅鉢A、縄文地深鉢（7）・鉢（10）、条線地深鉢（8）、注口土器、無文深鉢・鉢・（11）浅鉢などからなり、器種の多様化を指摘できる。

有文深鉢Aの口縁部は外面施文型（1・2）、上面施文型（4）、内面施文型（3）があり、外面施文型が多いが、c2種のように屈曲や内湾によって口縁を際だたせるのではなく、口縁前面に粘土をはりつけ、肥厚させるタイプが出現する。これをf種口縁としておこう。口縁部の主文様には弧線文や渦巻文が施され、従文様には長方形区画文ないし弧線文、斜線文が施される。前者は1期の沈線文、後者は刻みに由来する。頸胴部の文様は分帯し、篦状・櫛状工具で描かれ多条化するのが特徴である。頸部文様は垂下直線文、山形文、類例は少ないが垂下する有刻隆帯を施す。胴部文様は篦状工具による鍵の手状の曲線文、半円文・弧線文を基調とした曲線文、篦状・櫛状工具による山形文や垂下直線文が施される。鍵の手状の曲線文は1期のa2類文様、半円文・弧線文を基調とした曲線文は1期のb類文様の系譜で捉えられよう。山形文はb類文様の硬直化ないしc類文様の系譜で考えられる。胴部に地文をもつ例は少ないが有する場合は半円文・弧線文を基調とした文様が描かれ、頸部に有刻隆帯を垂下させる。半円文・弧線文系の文様は関東の堀之内1式の文様と共通し、やはり、堀之内式の文様要素である垂下する有刻隆帯を有するなど折衷的な様相が強い。関東系有文深鉢は口縁部が内折

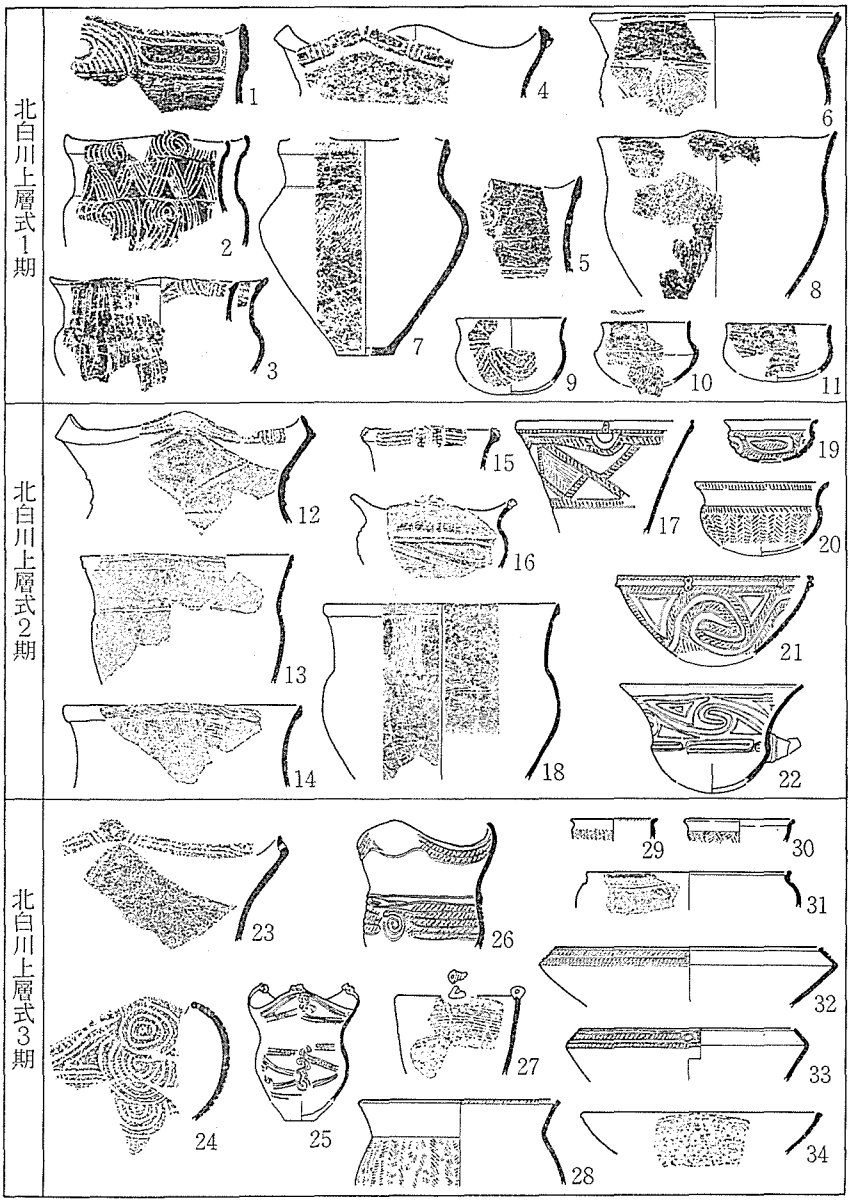



図7　近畿における縁帯文土器の展開　縮尺：復元図1/12，断面図1/8
（1～11京都府京都大学植物園，12～22大阪府縄手，23・24奈良県竹内，25・28～30・32・33和歌山県下尾井，26・27・31・34京都府桑飼下）

し、一条沈線を巡らすものが多く、胴部には地文をもち、半円、弧線文を基調とした曲線文を施す。堀之内1式新段階に比定されるものが多い。

有文鉢Bは口頸部の外反する小形丸底の鉢。有文鉢Cは、頸胴部の境に刻みを施す鉢で量は少ないが広域に分布し、地域間の併行関係を考える上で重要な資料となる。有文浅鉢Aは口縁部が内湾する浅鉢。有文鉢B、有文浅鉢Aとも文様は半円文や弧線文を基調とした曲線文様が施される。縄文地深鉢・鉢成立の系譜はよく分からないが[18]縁帯文系土器群が分布する東海西部から中国地方にかけてこれ以降、相似的変化を示しながら分布し、縁帯文系土器群の重要な構成器種の一つになる。

**北白川上層式2期**　器種組成は「く」字形に屈曲する有文浅鉢Cが出現するが、基本的に1期と変わらない。深鉢Aは口縁部形態については外面施文型では肥厚、屈曲が弱く退化的な様相を示すもの(13—g種口縁とする)とc2種で断面「L」字形を呈するもの(12)がある。内面施文型も肥厚しなくなるもの(j種口縁とする)が出現する。上面施文型(d種)は類例が多く(15)、断面「T」字形を示し、山形の大きな波状口縁を呈するものが多い。口縁部主文様、従文様とも北白川上層式1期の文様をそのまま継承したもののほか主文様に8字状・円形・棒状の突起を施すものが出現する。頸部文様は無文か沈線・条線による垂下直線文ないし有刻隆帯を垂下させる。深鉢A・Bの胴部文様は縄文地や条線地(18)で無文のものが多くなるが、文様を施す場合(16)には山形文や帯縄文によるJ字文、三角形文を組み合わせた文様や入り組み文を施し、前段階と異なり、文様が横位に展開するのが特徴である。帯縄文による文様は前段階の文様の系譜で捉えることは困難で、堀之内2式の「渦巻文[19]」と類似した文様構成をとる。関東系有文深鉢(17)は朝顔形で口縁下に有刻隆帯を横走させ、体部に帯縄文による三角形文や入り組み文、渦巻文を描く、堀之内2式そのもので類例は多い。

浅鉢A(21)は帯縄文により、横にながれる入り組み文や渦巻文、J字文、三角形文が組み合わされた文様が施され、浅鉢Cの口縁部の文様は三角形文が描かれる。

総じて、文様における関東系土器の影響の強さを指摘できよう。

**北白川上層式3期**　初期の様相は京都大学教養部構内出土資料で捉えられ、やや遅れて内湾口縁深鉢（深鉢Cとする）が成立、盛行する時期が後続する。[20]

基本的器種構成は有文深鉢A（23）が減少し、有文深鉢C（24～26）が成立するが、その他は前段階の器種構成を継承する。有文深鉢Aは「く」字形の口縁部を有するが量的に少なくなる。新たに三単位の波状で口縁部が大きく内湾する有文深鉢Cが出現し、盛行する。有文深鉢Cは口縁部および胴部文様とも横位、斜位に帯縄文を巡らし、S字文やそれの退化型である蛇行文を配する。文様は前段階の渦巻文の系譜で捉えられよう。口縁内縁施文型や頸部無文の縄文地深鉢・鉢、無文深鉢では口縁を肥厚させることがなくなり、頸部の外反度が強まる。関東系有文深鉢（27）は加曾利B1式に比定される。有文浅鉢A（34）は深鉢Aと同一の文様が描かれ、有文浅鉢C（32・33）は直線的な帯縄文でクランク文が描かれる。

### 3　中部瀬戸内地域（図8）

まず、既にふれたように津雲A式と彦崎K1式の関係が問題となろう。これを標識資料である津雲、[21]彦崎出土土器[22]に戻って検討してみる時、両者は類似した様相を示す一方、器種組成や口縁部文様の施文位置、文様や形態の細部における形状に明らかな差異を有しており、別型式として認定することが妥当であると考える。その上で、他の遺跡に目を転じると広島県洗谷、[23]芋平[24]では成立期の縁帯文土器とともに津雲A式が出土していること、香川県永井のSR8601下層では津雲A式が単純に出土していること、[25]香川県樋ノ口では彦崎K1式が単純に出土していること[26]が指摘できる。さらに、彦崎では彦崎K1式と彦崎K2式が地点を異にして出土しており、[27]これらの事実を総合すると津雲A式と彦崎K1式は年代差をもった型式であり、中部瀬戸内における縁帯文土器の展開は津雲A式↓彦崎K1式↓彦崎K2式の序列で捉えることが可能となろう。以下、有文深鉢を中心に型式内容の概略について検討する。

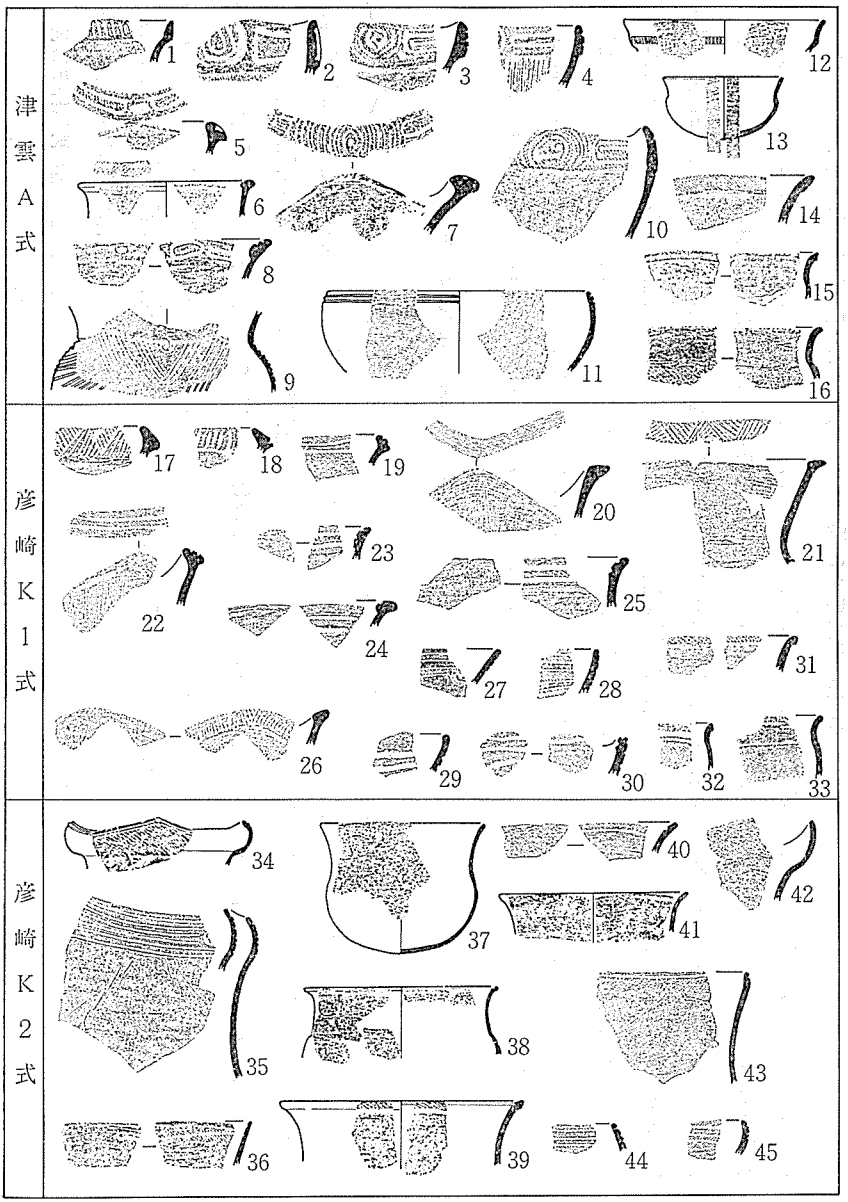



図8　中部瀬戸内における縁帯文土器の展開　縮尺：復元図1/12，断面図1/8
（1～5・8・10・14岡山県津雲，6・7・9・11～13・15・16・27・28・32・33香川県永井，17～26・29～31・40・42～45岡山県彦崎，34・37岡山県広江・浜，35広島県宇治島36・41，香川県ナカンダ浜，38岡山県西畑田，39岡山県竹原）

**津雲A式**　器種は有文深鉢A（1～9）、有文鉢C（12）・D（10・11）、頸部無文の縄文地深鉢（14～16）・鉢（13）、無文深鉢・浅鉢などからなる。

有文深鉢Aは口縁部形態では前面施文型（1―c2種、2～4―f種）、上面施文型（5～7―d種）、内面施文型（8―g種）があり、口縁部前面を段状に肥厚させるf種が多い。頸胴部の文様は分帯して、頸部には格子状文、胴部には多条沈線による半円文、三角形文、充塡縄文による横に流れる入組渦巻文が描かれる。格子状文、三角形文については前者はa1種文様、後者はb種文様の系譜で捉えられよう。

有文鉢は口縁部が外反し、頸胴部に刻み目文帯をもつ鉢Cと口縁部に文様帯をもつ大型の鉢Dがある。鉢Dの口縁部の形態は段状に肥厚させるf種口縁を有し、文様は有文深鉢Aと同一である。中部瀬戸内に分布する特徴的な器種である。有文鉢Cは山陰、近畿にもあり、有文深鉢Aとともに年代的併行関係を決定する資料になる。

**彦崎K1式**　有文深鉢A（17～26）・B、有文鉢E、有文浅鉢A（27～30）、頸部無文の縄文地深鉢（31）・鉢（32・33）、無文深鉢・浅鉢などから構成される。有文鉢C・Dはなくなる。

有文深鉢Aは上面施文型のd種が主体を占めるようになるが、外面施文型のc2種や内面施文型のe種やその退化型のh種もある。口縁部の文様は前段階よりも粗雑になり、直線化したものが多く、退化的様相で捉えられる。特に、弧線文に由来する複合鋸歯文が特徴的である。頸胴部の文様は表出技法を条線により、前段階の文様の型式変化で捉えられる垂下蛇行文や斜線文が施される場合と二条沈線による磨消縄文帯が入り組み状の文様を構成する場合の二者があり、近畿の文様変化と相似的であることが伺える。有文鉢Eは九州の鐘崎式に出自を求められ、安定的に器種を構成するかどうかは今後の課題である。縄文地の土器では胴部に羽状縄文を施したものがあり、有文浅鉢Aは二条を基本とした縄文帯を横位に巡らしている。

**彦崎K2式**　有文深鉢A（36）、有文深鉢C（34・35）、有文浅鉢A・C（44）、頸部無文の縄文地深鉢（37～43）・鉢、注口土

器、無文深鉢・浅鉢などから構成される。有文深鉢Aは量的に少なく、内面施文型のみとなる。内湾する口縁を有する深鉢Cも量的に多くなく、多条沈線による縄文帯で直線とS・J字状の曲線を組み合わせた文様を描く。一方、頸部無文の縄文地深鉢・鉢は増加する。口縁部の肥厚が痕跡的となり、口縁部内面にも沈線で区画されて縄文を施すようになるのが特徴的である。結節縄文を施す例も多いが、後出的な要素であろう。有文浅鉢Aは有文深鉢Cの胴部文様と同種の文様を有する。注口土器は関東の加曾利B1式そのものである。

## 4 山陰地域(図9)

山陰ではまとまった資料は少なく、型式内容を正確に把握することは難しい。崎ヶ鼻式はその特徴より中部瀬戸内の津雲A式や彦崎K1式に対比されてきたが、型式学的検討から前後二時期に細分することは可能であろう。崎ヶ鼻1式は鳥取県布勢[29]、島[30]、栗谷[31]、島根県崎ヶ鼻[31]にややまとまった資料があり、崎ヶ鼻2式は崎ヶ鼻一九三七年報告の主たる土器[32]で布勢や島、栗谷では崎ヶ鼻2式を含まないと考えられる点も細分の根拠としえよう。ただし、一括性や器種組成等の検討は今後に委ねるべき部分が多い。

**崎ヶ鼻1式** 有文深鉢A(1〜7)、有文鉢C(8)、頸部無文の縄文地深鉢(9)・鉢(10〜12)、注口土器、無文深鉢、無文浅鉢などからなる。有文深鉢Aの口縁部は前面施文型が主体で、幅広く段状に肥厚させるf種口縁をもつ例が多い。口縁部文様は弧線文や斜線文、長方形区画文などで構成され、突起部で入り組み状文様をつくるものが多い。頸部は無文で、胴部は全面に縄文を施したり、縄文地に同心円状の多重沈線を施す。

**崎ヶ鼻2式** 有文深鉢A(13〜15)・B(16)、有文鉢E、有文浅鉢A(21・22)、頸部無文の縄文地深鉢(18〜20)・鉢(17)、注口土器、無文深鉢・浅鉢などから構成される。

有文深鉢Aでは、前面施文型、口唇上施文型、内面施文型があり、前面施文型では前段階の肥厚口縁と異なり、内側へ

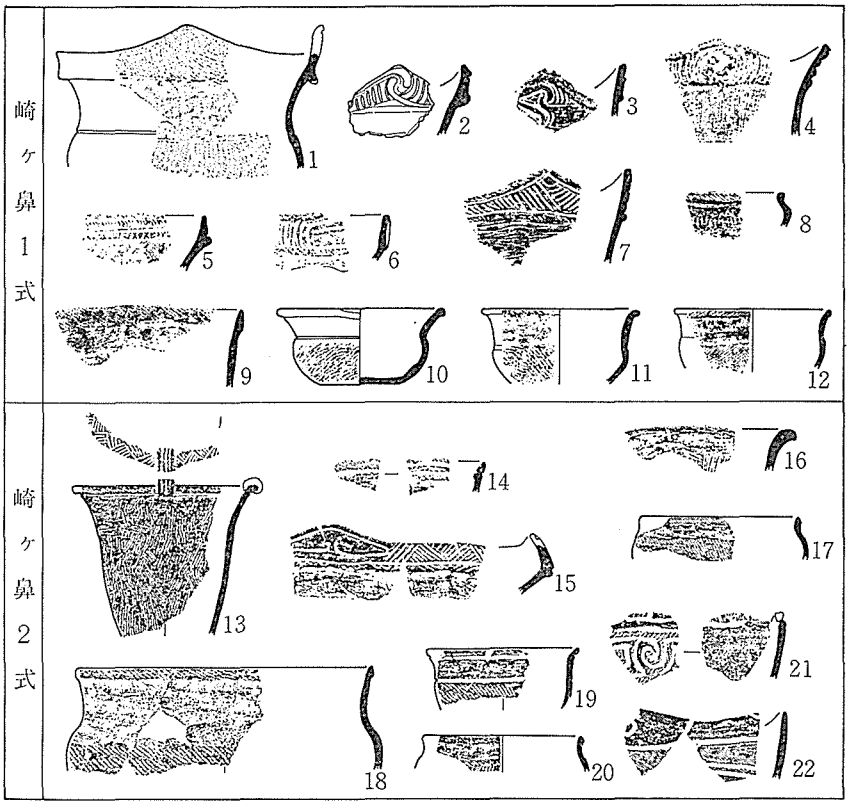



図9　山陰における縁帯文土器の展開　縮尺1/8
（1・2鳥取県栗谷，3～12鳥取県布勢，13～22島根県崎ヶ鼻）

屈折したもの（C2種）が多くなる。口縁部文様には斜線文から発達したと考えられる複合鋸歯文が多用される。深鉢A・Bの頸・胴部文様のわかる例は少ないが、頸部に垂下条線を施した例のほかでは全面縄文地の例がある。有文鉢Eは九州の鐘崎式そのものであり、安定的に器種を構成するか否かは今後の検討課題である。有文浅鉢Aは二条の縄文帯が「J」字状文を構成したり、口縁部に瘤状突起を貼り付け、「S」字状沈線を巡らせるなど鐘崎式に通じる特徴を有している。

### 5　東海西部地域（図10）

東海西部における縁帯文土器の展開は三期に分けてその展開を辿ることができるであろう。一期と二期の細分については愛知県林ノ峰貝塚[18]、二期と三

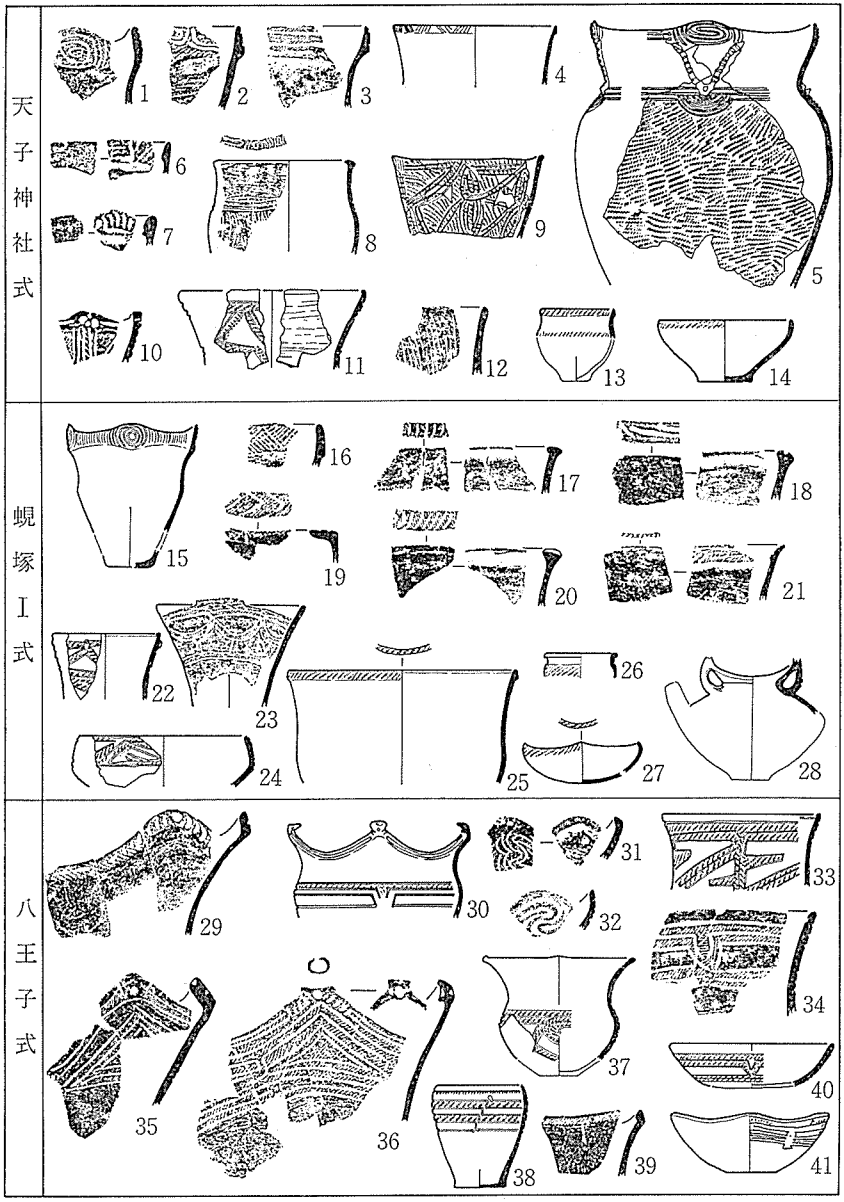



図10　東海西部における縁帯文土器の展開　縮尺：復元図1/12，断面図1/8
（1～3・5・9～22・24～28愛知県林ノ峰，4・6～8・23・36静岡県蜆塚，29・39愛知県中条，30・38・41愛知県八王子，31～35・37・40静岡県半場）

期の細分は静岡県蜆塚第一貝塚東南部区域[34]における層位的所見を基準にしえよう。これらの所見をもとにすれば、愛知県天子神社[35]、川地[36]、静岡県蜆塚第二貝塚西部区域純貝層・混土貝層出土土器[37]が一期の、石原出土土器[38]が二期の、愛知県中条出土土器[39]が三期のほぼ単純資料と考えられ、基準資料とし得よう。従来の型式では一期は天子神社式、二期は蜆塚Ⅰ式、三期は八王子式（蜆塚Ⅱ式）にほぼ対比できる。

**天子神社式**　有文深鉢A（1～8）、関東系有文深鉢（9～11）、頸部無文の縄文地深鉢（13）・鉢（14）、条線地深鉢（12）、有文浅鉢A、注口土器、無文深鉢・浅鉢などからなる。

有文深鉢Aの口縁部形態は前面施文型、上面施文型、内面施文型がある。主文様には弧線文や渦巻文を配し、従文様に長方形区画文ないし斜線文・弧線文を施す。頸胴部の文様は分帯し、頸部は無文帯とするか有刻隆帯を垂下させる。胴部には多重沈線による半円文を基調とした曲線文が描かれる。地文に縄文を施す場合は頸部に有刻隆帯を垂下させるなど関東系深鉢の影響が強い。そのあり方は近畿の深鉢Aと強い類似性を示しているといえよう。関東系有文深鉢は胴部に地文をもち、弧線文や半円文を基調とした曲線文を施す堀之内1式新段階に比定されるものが多いが、少量、堀之内2式的土器も伴っている。

**蜆塚Ⅰ式**　器種組成は基本的に一期を継承するが「く」字形に屈曲する浅鉢（有文浅鉢C）が出現する。有文深鉢A（15～21）の口縁部はは外面施文型（f種）、上面施文型（d種）、内面施文型（e・h種）がみとめられるが、上面施文型で口唇を「T」字、逆「L」字形に肥厚させるものが多くなり、弧線文や斜線文、斜線文を組み合わせた羽状文を施す。また、斜線文から発達した複合鋸歯文も多用される。頸胴部の文様が分かる例は少ないが無文にする例が増加するようだ。関東系有文深鉢（22）は朝顔形の器形を有し、帯縄文で三角形文を描き、堀之内2式そのものといえるものが多いが後半期には三角形文の退化した連弧状文や「8」字状の曲線文を施した在地的色彩の強いもの（23）が現れ、三期に至って在地型器種を成立させる母胎となる。有文浅鉢Aは渦巻文や帯縄文による横にながれる入り組み文を施す。有文浅鉢C（24）は帯縄文による三角

形文を描く。

**八王子式**　器種構成は新たに有文深鉢C(31・32)・D(35・36)・E(33・34)、関東系有文浅鉢(41)が成立し、有文深鉢が多様化する。頸部無文の縄文地鉢がなくなる。

有文深鉢A(26・30)は口縁部が「く」字形に屈曲する。この口縁部形態は二期の「L」字状口縁から成立するのであろう。内湾口縁を有する有文深鉢Cは量的に少ない。有文深鉢Dは口縁部が「く」字形に屈曲する三単位波状口縁で口縁部と頸部に文様帯を有する。有文深鉢Eは口頸部が外反する平縁形で口頸部に文様帯をもつ。有文深鉢Eは器形と文様帯の位置から判断して蜆塚I式期の関東系深鉢の系譜上で捉えられ、在地化した器種と考えられる。有文深鉢Dは有文深鉢Eに「く」字形の口縁部を付加した形態で、口縁部の形状は有文深鉢Aの「く」字形口縁に共通し、有文深鉢Aと在地化を深めつつあった関東系深鉢との融合によって成立すると考えられる。

有文深鉢の頸胴部文様は三本沈線を主体にした帯縄文で描かれ、四種類に大別することができよう。(a)横にながれる連弧文、(b)クランク状の幾何学文、(c)横にながれる入り組み文、(d)S字文+斜線文である。文様a・bは前段階の関東系有文深鉢の文様の在地的変化で説明でき、文様c・dは蜆塚I式期に関東から近畿の広範囲の地域で採用された横にながれる入り組み文や渦巻文から成立すると考えられよう。文様a・b・cは文様の接合部がV字形に下がるという共通する特徴を有し、系譜の異なる文様の年代的同時性を示している。有文深鉢D・Eが東海西部をほぼ主体的な分布地域とするのに対して、有文深鉢Cは近畿、東海西部、中部瀬戸内に分布し、近畿で類例が多いことを考慮すると文様dを有する有文深鉢Cは近畿で成立した器種である可能性が高い。関東系深鉢(38)は平縁、三単位の突起を有するものなど細別しうるがいずれも加曾利B1式に比定される。

有文浅鉢A(40)は小型のものが多く、有文深鉢の文様aが施され、有文浅鉢Cは量的に僅かである。

① 麻生優「第六　土器」(『蜆塚遺跡――総括篇――』、一九六二年)。　② 市原壽文・大参義一「縄文文化の発展と地域性――東海――」(『日

本の考古学』Ⅱ、一九六五年）。

③ 久永春男「縄文後期文化――中部地方――」（『新版考古学講座』三、一九六九年）。

④ 増子康真「第三章　東海地方西部の縄文文化」（『東海先史文化の諸段階』本文編・補足改訂版、一九八一年）。

⑤ 山下勝年「第四章出土遺物　第一節縄文土器」（第二章注㉙前掲文献）。

⑥ 原田修ほか『縄手遺跡』1、一九七一年。

⑦ 渡辺誠「第三章縄文時代の遺構と遺物　第四節縄文土器」（『桑飼下遺跡発掘調査報告書』、一九七五年）。

⑧ 泉拓良「北白川上層式土器の細分」（『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五四年度、一九八〇年）。

⑨ 第一章注②前掲文献。

⑩ 三森定男「先史時代の西部日本」（下）（『人類学先史学講座』第二巻、一九三八年）。

⑪ 第一章注①前掲、鎌木・木村文献。

⑫ たとえば、第一章注①前掲、鎌木・木村文献では、口縁部外面肥厚を主体に口縁部内面肥厚をともなう一群を津雲A式、逆に、内面肥厚が主体で外面肥厚を少量ともなう一群を彦崎K1式とし、第一章注①前掲鎌木・高橋文献では、幾何学的な文様をもつ類を彦崎K1式とし、津雲A式は曲線的な縁帯文をもつ類としている。また、田中良之・松永幸男「後期土器について」（『萩台地の遺跡』Ⅵ、一九八一年）では、口唇上施文タイプと内面施文タイプに限って彦崎K1式と規定している。このように、論者によって型式内容の捉え方に齟齬が生じているのは彦崎K1式の型式内容が設定者である山内清男氏によって明確にされなかったことに一因があると考える。こうした現状を打開するためには、設定の基準資料となった津雲遺跡、彦崎遺跡出土土器に再度たちもどって検討し直すこととその後の新出資料で検証してゆくことが必要となろう。

⑬ 第一章注⑱前掲、岩崎文献。

⑭ 門田了三『下川原遺跡』、一九八六年。

⑮ 芋本隆裕ほか『縄手遺跡・若江遺跡の調査』昭和六一年度（『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要』二八、一九八七年）。

⑯ 松田真一「当麻町竹内遺跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）』一九八四年度、一九八五年）。

⑰ 藤永正明『淡輪遺跡発掘調査概要報告書・Ⅷ』、一九八七年。

⑱ 泉拓良氏は、近畿の中期末に存在する縄文地の土器に出自を求めたが年代的断絶が大きすぎるように思われる。同期の東日本には全面に縄文を施す粗製土器があり、また、関東系有文深鉢は地文に縄文を有するので東日本との関連で考える必要もあろう。

⑲ 石井寛「堀之内2式土器の研究（予察）」（『調査研究集録』第五冊、一九八四年）。

⑳ 京都大学教養部出土資料（注⑧前掲文献）は、土器量が多くなく器種構成等を検討する上で、やや不安は残るものの、有文深鉢Cを欠いていることに注目したい。本遺跡で出土した関東系深鉢は堀之内2式～加曽利B1式の型式特徴を有し、他の基準遺跡の同種深鉢よりも若干古い様相を示している。また、有文深鉢Aの口縁部形態も肥厚の仕方が外側へやや張り出し、型式学的に前段階の特徴を残している。以上の点より、本遺跡出土土器は北白川上層式3期の初期的様相を示していると考えている。また、有文深鉢Cとした内湾口縁深鉢は口縁部と胴部文様帯を有し、見掛け上は深鉢Aと同一の文様構成をとる。しかしながら、口縁部の文様帯は関東の加曽利B式の有文鉢の頸部文様帯との関連が伺われ、また、山の数でも前段階の四山から三山へと変化があり、この点でも関東でこの時期に盛行する三波状ないし三単位

突起との関係が問題となろう。以上の点より、深鉢Cは西日本独自の器種と考えるがその成立には東日本の土器の影響が推定され、単純に前段階の深鉢Aの延長線上に位置付けることはできないので、別器種として分類した。なお、有文深鉢Cの文様帯構成については西脇対名夫氏に御教示を得た部分がある。記して謝意を表したい。

㉑ 島田貞彦ほか「備中国浅井郡大島村津雲貝塚発掘報告」(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第五冊、一九二〇年)。

㉒ 池葉須藤樹『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』、一九七一年で後期1式とされた土器群。

㉓ 第一章注㉓前掲文献。

㉔ 第一章注㉔前掲文献。

㉕ 渡部明夫「各遺跡の調査——永井遺跡」(『四国横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘調査実績報告』昭和六一年度、一九八七年。

㉖ 片桐孝浩「樋ノ口遺跡」(『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和五九～六二年度、一九八八年)。

㉗ 注㉒前掲文献、図版一三および筆者の観察による。一・三・五区では彦崎K2式が、九・十・十一区では彦崎K1式がまとまって出土しており、地点間で土器の出土状況に差が認められる。

㉘ 第一章注㉖前掲文献。

㉙ 第一章注㉕前掲文献。

㉚ 谷岡陽一ほか『栗谷遺跡発掘調査報告書』Ⅱ、一九八九年。

㉛ 宍道正年『島根県の縄文式土器集成』Ⅰ、一九七四年。

㉜ 佐々木謙・小林行雄「出雲國森山村崎ケ鼻洞窟及び権現山洞窟遺蹟」(『考古学』第八巻第十号、一九三七年)。

㉝ 第一章注㉝前掲文献。C貝層(混貝土層)出土土器群と、その上層のB層(黒褐色土層)出土土器群の差。

㉞ 久永春男「第一貝塚東南部区域の発掘調査」(『蜆塚遺跡』その第三次発掘調査、一九六〇年)。下部貝層群及び地上直上出土の有機土層出土の「第一群土器」と上層黒褐色混土貝層、ピットD・E・F、含礫褐色有機土層出土の「第二群土器」の差。

㉟ 加藤岩蔵『天子神社貝塚』、一九六八年。

㊱ 清野謙次『日本貝塚の研究』、一九六九年。

㊲ 久永春男「第二貝塚西部区域の発掘調査」(『蜆塚遺跡』その第二次発掘調査、一九五八年)。

㊳ 第一章注㊷前掲文献で、広瀬土壙40段階を引いた残りの資料。

㊴ 加藤岩蔵ほか『中条貝塚』、一九六八年。

# 第三章　西日本縄文後期前半期の地域相

## 1　地域別編年の併行関係と地域色の実態

前章において地域別に縁帯文系土器群の編年を検討し、その成立、展開の過程を明らかにした。本節では地域別編年の併行関係を整理し、地域色の発現の仕方を論じたい。

地域別編年の併行関係の決定には複数地域で共有される器種を基準にすることができよう。有文深鉢A、関東系有文深鉢、有文鉢Cなどが地域編年を結び付ける資料として活用できよう。このうち、有文深鉢Aは口縁部の形状や胴部文様からさらに細分して検討したが、細別器種が個別地域で量的多寡はあるものの共有され、また、相似的変化を示しており、併行関係を類推する手がかりとし得よう。検討の結果を表1に示す。四段階の変遷で捉えられるのでⅠ～Ⅳ期と仮称することにしよう。山陰では現在、Ⅳ期に属する資料はほとんど検出されておらず、如何なる様相を示すのかは今後の課題とせざるを得ない。次に、こうした併行関係にもとづいて地域色がどのように現れているか（地域色の実態）について多面的に検討し、地域間の関係復元の足がかりとしよう。

表1　地域別編年の併行関係

| 時期＼地域 | 東海西部 | 近畿 | 中部瀬戸内 | 山陰 |
|---|---|---|---|---|
| 福田K2式期 | 称名寺2/福田K2 | 福田K2 | 福田K2 | 福田K2 |
| Ⅰ期 | （朝日） | （広瀬土壙40） | （洗谷） | 布勢 |
| Ⅱ期 | 天子神社 | 北白川上層式1期 | 津雲A | 崎ケ鼻1 |
| Ⅲ期 | 蜆塚Ⅰ | 北白川上層式2期 | 彦崎K1 | 崎ケ鼻2 |
| Ⅳ期 | 八王子 | 北白川上層式3期 | 彦崎K2 | |

括弧付きは，型式名ではなく，その時期を代表する遺跡を示す。

**器種組成**　地域別の器種組成の変遷を表2に示す。器種組成はある程度、資料がまとまっている遺跡を取り扱ったが、資料状況に貧弱な部分もあり、空白部分について今後埋められる可能性や器種の存否という定性的検討にとどまっている点を考慮した上で現状では次のような器種組成に関する地域色を認めることができるであろう。

第一に、個別地域はⅠ期を除いてそれぞれ独自の器種組成を有していることに注意しよう。これに対して、個別地域内で複数遺跡を検討対象にし得た地域・時期ではそれらの遺跡間では、ほぼ同一の器種組成を示している。これは、ある特定の器種の存在、あるいは器種の欠落が個別地域単位で発生しており、この点では、個別地域は明確に分離しうるのに対し、個別地域の内部では分離が難しいことを示している。

Ⅰ期については器種組成を検討しうる資料が少なく、明らかでない部分が多いが、近畿南部に分布する条線地深鉢が注目されよう。東海西部ではⅠ期に確実に属する条線地深鉢は知られ

表2　地域別時期別にみた器種組成の変遷

〔Ⅰ　期〕

| 地域＼器種 | 有文深鉢A | 関東系深鉢 | 条線地深鉢 | 無文深鉢 | 無文浅鉢 |
|---|---|---|---|---|---|
| 東海西部(西貝塚) | ○ | ○ | | | |
| 近畿南部(広　瀬) | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 近畿北部(小森岡) | ○ | | | ○ | ○ |
| 中部瀬戸内(洗　谷) | ○ | | | ○ | ○ |
| 山　　陰(　島　) | ○ | | | ○ | ○ |
| 山　　陰(森　藤) | ○ | | | ○ | ○ |

〔Ⅱ　期〕

| 地域＼器種 | 有文深鉢A | 有文深鉢B | 関東系深鉢 | 有文鉢B | 有文鉢C | 有文鉢D | 有文浅鉢A | 縄文地深鉢 | 縄文地鉢 | 条線地深鉢 | 無文深鉢 | 無文浅鉢 | 注口土器 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東海西部(蜆塚第2貝塚) | ○ | | ○ | | | | | ○ | | ○ | ○ | | |
| 東海西部(林ノ峰C層) | ○ | | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 近　　畿(京大植物園) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 近　　畿(林ＳＢＯ1) | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 中部瀬戸内(津　　雲) | ○ | | | | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | |
| 中部瀬戸内(永井ＳＲ8601) | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | |
| 山　　陰(布　　勢) | ○ | | | | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ |

〔Ⅲ　期〕

| 地域＼器種 | 有文深鉢A | 有文深鉢B | 関東系深鉢 | 有文鉢B | 有文鉢E | 有文浅鉢A | 有文浅鉢C | 縄文地深鉢 | 縄文地鉢 | 条線地深鉢 | 無文深鉢 | 無文浅鉢 | 注口土器 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東海西部(石　　原) | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 東海西部(林ノ峰B層) | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 近　　畿(下川原ＳＢ9) | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 近　　畿(縄　　手) | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | |
| 中部瀬戸内(彦　　崎) | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | |
| 中部瀬戸内(樋　ノ　口) | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | |
| 山　　陰(崎　ケ　鼻) | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | |

〔Ⅳ　期〕

| 地域＼器種 | 有文深鉢A | 有文深鉢B | 有文深鉢C | 有文深鉢D | 有文深鉢E | 関東系深鉢 | 有文鉢A | 有文浅鉢A | 有文浅鉢C | 縄文地深鉢 | 縄文地鉢 | 無文深鉢 | 無文浅鉢 | 注口土器 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東海西部（蜆塚第1貝塚） | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ |
| 近　　畿（竹内第7地点） | ○ | | ○ | | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| 近　　畿（桑　飼　下） | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 中部瀬戸内（百間川沢田） | ○ | | ○ | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ |

ていないが、前述したように本器種が関東からの影響について成立したという想定が正しければ東海西部でもⅠ期には既に器種を構成していたとも考えられ、近畿中央を境に東西二地域に分離し得よう。

第二に、全時期を通じて関東系有文深鉢を器種に含む東海西部・近畿と含まない瀬戸内・山陰に大別することができよう。このことは近畿までは縁帯文系土器群の成立、展開において関東土器との密接な交流が存在したことを示している。

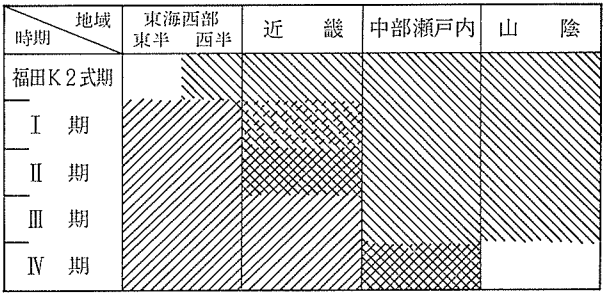
第三に、Ⅳ期の東海西部を除くと個別地域での器種変遷は連続的な傾向にあり、かつ、Ⅲ期における器種の多様化が各地域で若干の差異をみせつつも相似的に発生していることに示されるように地域間の交流は活発である。これに対して、Ⅳ期における東海西部の有文深鉢における新たな器種の成立に注目しよう。これは従来説明されているような加曾利B1式の影響というよりも既に明らかにしたように在地的な土器の変化過程で説明でき、本段階に東海西部の独自色が強まったことをみてとれよう。

**有文深鉢A**　有文深鉢Aは縁帯文系土器群を構成する主要な有文土器であり、口縁部の形状、文様、頸胴部の文様を細別して検討を加えてきた。ここでは重要と考える点のみ記しておきたい。

第一に、文様、口縁部の形状とも個別地域内部において、型式学的に連続性が辿れる一方、その変化は地域間比較を通してみるとき、相似的に発生しており、密接な地域間交流を保ちながら生じていることが推測できる。

第二に、にもかかわらず、細部においては地域色が存在することもまた指摘できる。Ⅰ期

表3　縄文原体の時期的変遷と地域色




LR圧倒的優勢　RL圧倒的優勢
RL優勢　LR・RLほぼ同数

についてはすでにふれたが、Ⅱ期では、山陰の口縁部主文様の入り組み文、山陰・東海西部では頸部を無文帯にする例が多いのに対して、近畿では全面にわたって、また、中部瀬戸内では突起、波頂部下に施文する例が多い点、Ⅲ期では口縁部文様の複合鋸歯文が東海西部・中部瀬戸内・山陰では盛行するのに近畿ではほとんど認められない点、東海西部・山陰では胴部文様をほとんどもたない点、Ⅳ期では中部瀬戸内では口縁内面施文型に限定され、近畿では量的に減少する一方、東海西部では安定的に器種を構成する点などそれぞれの地域ごとの独自性の存在もまた無視できない。

**縄文原体**　縄文の撚りは、基本的にLRかRLを用いており、時期別・地域別のまとまりが認められる。ここでは、縄文を施す器種を一括して、撚りの方向を時期別、地域別にみてみよう。

表3から、一貫してLRが優勢な東海西部、Ⅲ期までRLが圧倒的に優勢でⅣ期にLRが増加する瀬戸内中部、RL優勢からⅡ期にLR・RLほぼ同数に転換し、Ⅲ期にはLRが圧倒的となる近畿という三つの地域的まとまりを読み取れる。東日本では後期初頭以降、一貫してLR地帯であり、縄文の撚りの方向に関していえば東日本の西縁に位置する東海西部、西日本的な瀬戸内・山陰、その交錯する近畿という状況をみてとれよう。

**無文土器の調整手法**　無文土器は後期に入って一般化する粗製土器である。外面の調整手法に地域色が認められるか検討してみよう（表4）。外面の調整には基本的にa―撫で、b―二枚貝条痕、c―巻貝条痕、d―植物質原体による擦痕、e―削り、f―「細密条痕」等の手法がある。これらの手法は単一にのみ用いられるのではなく、まず、削りや条痕で荒仕

上げを行ったのち、撫でによって最終的な調整を行うような複数の手法が組み合わされている場合もある。当然、こうした複数の手法の組み合わせ方が問題になるが直接観察し得た資料が少ないので、ここでは最終的に器面に残った調整手法を検討素材としよう。無文土器を時期別に限定しうる資料は限られるのでここでは後期前半期として扱い、大まかな傾向を捉えることにしよう。

第一に、撫ではもっとも基本的な手法であり、全地域に共通する。

第二に、巻貝条痕が顕著な瀬戸内、「細密条痕」が特徴的な山陰・近畿北部、撫でが主体で手法が多様な近畿南部・東海西部というまとまりを指摘できよう。山陰から近畿北部（日本海沿岸部）に特徴的に分布する「細密条痕」は中期後半以降、器面の調整として現れており、有文土器の調整としても多用される。

表4　調整手法にみられる地域色

| | 東海西部 | 近畿南部 | 近畿北部 | 瀬戸内 | 山陰 |
|---|---|---|---|---|---|
| 撫で | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 擦痕（植物質） | ○ | ○ | | | |
| 削り | | ○ | ○ | | |
| 巻貝条痕 | ○ | ○ | | ○ | |
| 二枚貝条痕 | ○ | ○ | | | |
| 「細密条痕」 | | △ | ○ | | ○ |

表5　底部断面形態の変遷と地域色

| | 東海西部 | | | | 近畿 | | | | 中部瀬戸内 | | | | 山陰 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平A | 平B | 凹A | 凹B | 平A | 平B | 凹A | 凹B | 平A | 平B | 凹A | 凹B | 平A | 平B | 凹A | 凹B |
| Ⅰ期 | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | |
| Ⅱ期 | ● | ○ | | | ● | ○ | △ | | △ | | ○ | ○ | | | | |
| Ⅲ期 | ● | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | |
| Ⅳ期 | ○ | ● | | | ● | ○ | | | △ | △ | | ● | | | | |

●量多い　○普通　△僅少

**底部の形態**　深鉢の底部断面形態の地域色を検討する。深鉢の底部は平底と凹底に大別でき、平底は底面が撫で等によって仕上げられる平底Aと網代や木の葉の痕跡が残る平底Bに、凹底は底縁が高台状になる凹底A（いわゆる糸底）と底縁から中央に向かって立ち上がる凹底Bに細分しうる。

表5より、一貫して平底が優勢な近畿・東海西部と凹底A・B優勢からⅣ期に凹底Bが圧倒的に多くなる中部瀬戸内に大別できよう。凹底Aは福田K2式に一般的な形態で、凹底Bは西日本後期後半の主要な底部形態であり、縁帯文土器前半期に西日本

西部で底部形態の転換が行われたことがわかる。一方、平底は東日本の底部と共通し、近畿まで東日本の影響が底部についても及んでいたと理解できる。

## 2　土器からみた地域の関係

以上の検討結果をもとにして、縁帯文系土器群の構造について検討し、土器をもとにした地域間関係について論じよう。

まず第一に指摘すべきことは、従来の縁帯文系土器群は有文深鉢Aおよび縄文地土器の類似性（特に有文深鉢Aの類似性）に拠って把握されてきたということである。個別地域はそれぞれ独自の器種組成（Ⅱ型式）を有しており、この点では縁帯文系土器群とは個別地域を基本単位にした地域間交流と歴史的伝統性の強い諸型式群の総体的把握である。縁帯文系土器群と同時代の後期前半期について、同様の視点から隣接地域をみると関東・中部には堀之内・加曾利B式系土器群、九州には鐘崎式系土器群が広がり、縁帯文系土器群と対峙していた状況をみてとれる。ただ、ここで注意すべきことは堀之内・加曾利B式系土器群の構成器種が縁帯文系土器群の成立・展開の中で近畿・東海西部では安定的に器種組成を占めるような影響関係にあり、「〜系土器群」間の関係も排他的に分立していたというのではなく、親疎関係が存在したことを示しているということである。

第二に、器種組成という観点からみれば、個別地域は独自の器種組成を保った型式の分布範囲といえるが、こうした地域間の関係について器種や構成する要素のあり方から親疎関係が存在することを指摘しうる。器種レベルにみられるⅣ期の東海西部の独自色の強まりは地域間交流と地域の主体性の強弱を反映しているものと考えられる。

第三に、第二の点と関連を有するが、型式を構成する器種や属性の地域色の発現の仕方について検討したがその現れ方が異なることを指摘したい。器種組成からは東海西部、近畿、瀬戸内、山陰の四地域が、関東系土器の存否や底部形態からは東海西部・近畿と瀬戸内・山陰という二地域が、縄文原体の撚りの方向からは東海西部、近畿、瀬戸内・山陰という

三地域が無文土器の調整手法では東海西部・近畿南部、瀬戸内、山陰・近畿北部という三地域が区分し得るのである。

すなわち、一概に土器の地域色といっても扱う器種や属性の違いによって（どのレベルを問題にするかによって）、異なった地域色が描き出せるのである。こうした問題について、弥生土器の研究では比較的早くから問題にされ、詳細な検討が進みつつある。[1] 一方、縄文土器の研究においては文様を重視した分析的研究が主体を占める傾向が強く、こうした側面はあまり問題とされなかったが、地域間関係の復元という観点からすれば重要な問題といえよう。

さて、このように対象レベルを変えることによって異なる地域色が描かれることが明らかとなったが、その地域色のもつ意味、言葉を換えれば、問題にされている地域色の歴史的社会的性格を積極的に追究する必要があろう。こうした点について、深沢芳樹氏は近畿の弥生土器の壺の文様と甕の仕上げ方の地域色を検討し、「紋様は土器の表層的要素、仕上げ方は土器の基層的要素」と理解し、「紋様の地域性より仕上げ方の地域性をより重視したい」と述べている。[2]

確かに、深沢氏が指摘するように「紋様がなくても土器は使える。これに対して仕上げ方は土器作りになくてはならない」。ただ、逆にいえば、なくてもよい文様が一定の年代的空間的限定性を有しながら日本先史土器には施されてきたことも事実である。文様の具体的意味を論じることは本稿のよく為し得るところではないが、近藤義郎氏が指摘するように「土器への文様の付与とある種の形態部分の作出が、呪的行為のひとつの表現であり、また呪的行為を通して集団群の規制が働くとすれば」[3] 土器に文様を施すという行為は自「集団」と他「集団」を区別するという意図をもった意識的な行為であり、「集団」の個性の物的表現であったとも理解しうるであろう。これに対し、調整技法等はなくてはならないものだけに対「集団」という意味においては、それによって他「集団」と自「集団」を区別しようとしたものではなく、むしろ無意識的な行為であったと考えられる。要素のもつ意味に本質的な差異があったと推定されるのである。

このように考えることが許されるならば、調整技法等、土器作りになくてはならない部分を共有する地域は基層的地域、同一の文様を共有する地域は個性的地域と呼ぶことも可能となろう。こうした観点から、再度、地域間関係のあり方を検

討するならば縁帯文系土器群の分布圏がひとつの個性的地域、東海西部、近畿南部、中部瀬戸内、山陰・近畿北部を基層的地域としてまとめられ、基層的地域を核に文様等の情報を共有しうる地域が個性的地域として出現している様相をみてとれよう。そして、基層地域間の結合関係の変化により、Ⅳ期の東海西部地域のように独自の個性的地域への傾斜といった現象が生み出されてくると考える。以上を要するに、縁帯文系土器群の類似した地域相とは、前段階の福田K2式土器という広域土器圏を背景に、東海西部〜中国地方の基層的地域が相互に、特に、有文土器の情報交換を密接に行ないつつ、基層的部分においては地域的な伝統を保持しながら展開した姿といえるのである。

① 佐原眞・田辺昭三「鶏冠井遺跡」(『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書』、一九六五年)、佐原眞「大和川と淀川」(『古代の日本』5 近畿、一九七〇年)、松井潔「後期弥生土器の小地域性」(『考古学研究』第三三巻第一号、一九八六年)、深沢芳樹「弥生時代の近畿」(『岩波講座 日本考古学』5文化と地域性、一九八六年)、溝口孝司「土器における地域色」(『古文化談叢』第一七集、一九八七年)など。

② 注①前掲、深沢文献、一七三―一七四頁。

③ 近藤義郎「縄文時代の生産と呪術」(『日本考古学研究序説』、一九八五年、九〇頁。

## おわりに

以上、縄文後期前半期、東海から中国地方に類似した様相をもって変遷した縁帯文系土器群の成立・展開を個別地域別に編年の再整理を通して明らかにし、さらに土器を構成する多様な要素に注目して、地域色の現れ方を検討した。その結果、縁帯文系土器群として総称される土器群は四期に分けて、その成立・展開を辿ることができ、その成立には前段階の福田K2式の伝統と外来の土器の影響が関与していること、その展開は基層的地域が核となりつつ、とくに有文土器に関わる情報交換の密接さにより、東海西部〜中国地方という広域な地域に親縁度の高い類似土器相を成立させたこと、地域間の親疎関係の変化よりⅣ期には東海西部が独自の土器地域圏に傾斜しつつあることなどを明らかにしえた。

ただし、本稿では現象面に関する問題点の把握にとどめ、土器に表現された地域を成立させる紐帯(土器の地域色の社会

的背景）を如何に理解するかについてはほとんど触れなかった。こうした問題に踏み込むためには、なお、多くの手続きが必要であろう。他の考古事象の検討や民族誌的知見との対比にもとづく総合的考察が必要なことはいうまでもないが、さしあたって、次の検討課題は、本稿で基層的地域とした地域内における土器のあり方（土器の小地域色）を分析し、小地域単位が如何に結合して一地域の土器型式として成立するのかを検討すること、および縁帯文系土器群と同じレベルで隣接している鐘崎式系土器群、堀之内・加曾利B式系土器群との構造的差異を考究することだろう。

**謝辞**　本稿を提出するにあたっては小野山節先生より種々、ご配慮いただき、市原壽文先生には原稿を校閲していただき、文章表現についてもご指導を得た。岡村秀典氏には原稿、図面の作成に際してご指導いただいた。泉拓良氏、家根祥多氏をはじめとする京都縄文文化研究会の諸氏、菱田哲郎氏をはじめとする京都大学考古学研究室の諸氏、ならびに京都大学埋蔵文化財研究センターの諸学兄には日頃より有益なるご教示をいただいている。また、本稿の内容のうち、中部瀬戸内に関する部分については一九八八年一〇月一六日、考古学研究会岡山例会にて、また中部瀬戸内・近畿の編年の概要については同年同月三〇日に福岡県椎田町で開催された九州縄文研究会にて発表し、席上、前者の発表では平井勝・北條芳隆の両氏より、後者の発表では泉拓良・柴尾俊介・富田紘一の各氏よりご教示をうけた。資料の収集・観察においては、赤沢威・石坂俊郎・片桐孝浩・兼康保明・駒田利治・高松龍暉・谷岡陽一・玉田芳英・仁保晋作・野上丈助・平井勝・藤田憲司・松井直樹・松尾信裕・松田真一・向坂鋼二・山下勝年・山田猛・渡部明夫の各氏にお世話になった。以上の方々に、深甚なる感謝の意を表します。

**付記**　校正中に玉田芳英「中津・福田KⅡ式土器様式」・泉拓良「縁帯文土器様式」（小林達雄編『縄文土器大観』4、一九八九年一〇月）が発表された。本稿にかかわる部分として、玉田氏は「中津Ⅲ式」と呼称した土器群を福田貝塚の資料整理の結果は基づいて「福田KⅡ式の古段階として再設定」した。こうした考え方に立脚すれば、福田K2式は三細分することが可能となると考えるが、土器の変化という視点に立つと玉田氏が再設定した「古段階」と「新段階」の間には大きな変化が認められ、一線を画しても良いのではないかと考えている。泉氏は北白川上層式1期及び3期を二時期に細分したが1期の細分については「四ツ池式」とどのように区別しているのか筆者には理解しにくい。また、3期の細分については首肯し得ると考えるが系譜の理解等を異にするようである。本稿では個別地域内部での土器の細かな年代的変化について充分言及できなかったので稿を改めて成し得たいと思う。

## 挿図出典

図1　1—第一章注㉓文献、2・4・8—泉拓良・松井章『福田貝塚資料』奈良国立文化財研究所史料　第32冊、一九八九年、3—第一章注㉕文献、5～7—倉敷考古館編『倉敷の古代』、一九七二年、9・10—坪井清足『岡山県笠岡市高島遺蹟調査報告』、一九五六年。

図3　1・2・9～14—第2阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池遺跡』一七、一九七一年、3～8—同『池上・四ツ池遺跡』一六、一九七一年。

図4　1～4—第一章注⑰文献、5—第一章注⑱、大阪府教育委員会文献、6—第一章注⑱、岩崎文献、7・8—第一章注④、木下文献、9—第一章注⑱、仁科・工藤文献、10—筆者原図、11・12—第一章注⑱、橋本文献、13—第一章注⑱、渡辺文献、14～16—筆者原図。

図5　1—第一章注㉔文献、2～6—第一章注㉓文献、7～10—第一章注㉒文献、11～15・18—第一章注㉕文献、16—第一章注㉖文献、17—第一章注㉗文献。

図6　1・2—第一章注㉜文献、3～5—第一章注㉝文献、6・7・13・14—第一章注㉟文献、8—第一章注㉞文献、9・10—第一章注㊴文献、11・12—第一章注㊳文献。

図7　1～11—中村徹也『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』、一九七四年、12～16・18—第二章注⑮文献、17・19～22—原田修ほか『縄手遺跡』1、一九七一年、23・24—第二章注⑯文献、25・28～30・32・33—第一章注④、小野山・清水文献、26・27・31・34—第二章注⑦文献。

図8　1～5・8・10・14—筆者原図、6・7・9・11～13・15・16—第二章注㉕文献、17～26・29～31・40・42～45—筆者原図、27・28・32・33—渡部明夫「各遺跡の調査——永井遺跡」（『四国横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘調査実績報告』昭和六〇年度、一九八六年）、34・37—間壁忠彦ほか「広江・浜遺跡」（『倉敷考古館研究集報』第一四号、一九七九年）、35・36—筆者原図、41—大平要『考古資料収蔵目録』1、一九七八年、38—筆者原図、39—間壁忠彦「縄文後期彦崎KⅡ（竹原）式土器をめぐって」（『倉敷考古館研究集報』第一五号、一九八〇年）。

図9　1・2—第二章注㉚文献、3～12—第一章注㉖文献、13・17～22—第二章注㉜文献、14～16—第二章注㉛文献。

図10　1～3・5・9～22・24～28—第一章注㉝文献、4・6～8—第二章注㊲文献、23・36—第二章注㉞文献、29・39—第二章注㊴文献、30・38—牧富也ほか『西尾市史』1、一九七三年、31・32・34・35・37・40—第一章注㊵文献、33—向坂鋼二「3条沈線構成の磨消縄文土器」（『知多古文化研究』2、一九八六年）。

（京都大学埋蔵文化財研究センター助手　　）

# Formation and Evolution of the Entaimon (緑帯文) Type Pottery Group: Regional Characteristics in Western Japan during the First Half of Late Jōmon Period

CHIBA Yutaka

The purpose of this paper is to examine the formation and evolution of the Entaimon type pottery by considering the regional chronologies and the relation between regional characteristics of pottery. The type of pottery thought to appear at this stage is exemplified by the finds of Pit 40 of the Hirose site. It resulted from a mixture of typological changes in the region and influences from eastern Japan. A chronological examination of pottery type variations, revealed four phases. I focused on the aspect of diversity in the pottery, and examined how local characteristics developed in each type. The conclusions are, 1) the Entaimon type pottery group appeared and evolved as the result of frequent exchanges in pottery design over the large area of the core regions, and 2) in the forth period, according to changes in relations between diferent geographical regions, it is clear that pottery in the Tokai district gradually developed its own independent character.